シンポジウム
農山漁村の郷づくり

～その現状と建設技術者の役割～

主催：九州 郷づくり共助ネットワーク研究会

シンポジウム記録

九州の全面積の約7割を占める農山漁村地域では、地域コミュニティの崩壊や、耕作放棄等による自然環境の荒廃が深刻化しつつあります。私たちは、このような問題を抱える農山漁村地域の再生策として、都市住民との「共助」のネットワークづくりが必要と考え、その実現に向けて2008年11月に「九州 郷（さと）づくり共助ネットワーク研究会」（略称：共助研）を発足しました。

本シンポジウムは、共助研のこの1年間の活動を振り返りながら、九州の農山漁村における地域づくりの現状と、そこでの建設技術者の関わり方を検討する場として企画しました。

2010年1月7日(木)

(開場13:00) 13:30▸17:00

会場：八重洲博多ビル11階　ホールA

九州 郷づくり共助ネットワーク研究会

シンポジウム 農山漁村の郷づくり

～その現状と建設技術者の役割～

日　時：平成２２年１月７日（木）13:30～17:00

場　所：八重洲博多ビル１１階　ホールＡ

主　催：九州 郷づくり共助ネットワーク研究会
共　催：㈳建設コンサルタンツ協会九州支部
　　環境・都市等技術委員会
　　夢アイデア実行委員会

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊プログラム＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ⅰ．開会あいさつ

Ⅱ．第１部　基調講演 …… 3
「持続可能な郷づくりと専門家の役割
～高千穂町秋元地区での交流むらづくりを通じて～」
（講師：宮崎大学 准教授 吉武哲信 氏）
第２部　共助研活動報告 …… 23
① 共助研活動の総括報告 …… 24
② 事例研究チームの活動紹介 …… 27
③ ＧＩＳ分析チームの活動紹介 …… 29
④ 地域支援モデルチームの活動紹介 …… 31
第３部　パネルディスカッション …… 40
「農山漁村における郷づくりと建設技術者の果たすべき役割」

Ⅲ．閉会あいさつ …… 72

［　資料　］ …… 73

Ⅰ．開会あいさつ　　＜針貝会長＞

みなさんあけましておめでとうございます。当研究会の会長を仰せつかっております、針貝と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

本日は正月明けの大変あわただしい中、多くの皆様方にご参加をいただきましてありがとうございます。一昨年 11 月に発足致しましたこの共助研も、おかげさまで順調に初期の目的に沿って活動を進めているところでございまして、ひとえに皆様方のご理解、ご支援の賜物と深く感謝を申し上げる次第であります。

また、本日は基調講演をいただきます宮崎大学の吉武先生をはじめ、パネルディスカッションにご参加いただきます諸先生に深く御礼申し上げる次第であります。

後程、活動報告はさせて頂きますけれども、私から一言だけ、この間に進めてきたことについての感想を述べて、ご挨拶とさせていただきます。

只今、私どもの実践のフィールドとして、大分県豊後大野市犬飼町柴北地区・長谷地区の皆様方と交流を進めております。

典型的な少子高齢の過疎地域でありますけれど、ここに共助研のメンバーが押しかけまして、地元の方とワークショップを開いたりして、ご当地の我々なりの振興計画を作ったりしている所でございます。

このような活動を通じまして、一つ気付いたことですが、唯一ございました長谷小学校がいよいよ廃校になることになっております。つい 2、30 年前までは、1 学年 80 名、2 クラスある学校だったようですが、現在は 1 クラス 2、3 人というようなことで、いよいよ廃校の手続きになったということであります。

こういうふうにどんどん住む人の数も減って、随分以前から地元の皆さんは、指導者の方々をはじめ、「何とかしなければ」と思っておられたと思いますし、また今もそうであります。けれどもその実は、「ではどうしたら良いか」「どうしたら良いか分からない」そうこうする内に、5 年過ぎ、10 年経ち 20 年と経ってしまって、事態はさらに深刻さを増している。そういったことが九州のほとんどの過疎地の実情ではないのだろうかという思いを強くした訳であります。

もちろんこの間にみんなの意識が都市を向いた。20 世紀は都市の時代だったということも、そういう方向性になった大きな原因であろうと思いますが、「どうしていいかわからない」。ただ、ここで今一生懸命我々が取り組んでおりますことが、何か、どのような効果を生むか分かりませんけれども、プラスの方に変わっていくような手応えのようなものを私個人で感じています。ただこれは、地元の今日ご参加の皆さんに聞いてみないとわかりません。私の誤解かもしれませんが、共助することによって何かが変わるのではないか、このようなうっすらとした期待が生まれている訳であります。

「どうしていいかわからない」ということから、「こうしてみよう」という意識の変化ですね。

ただどうしていいかわからないまま沈んでいきそうな集落というのは九州では非常に多いのではないか、無数にあるのではないか。こうした状況に対して、従来の「公」というのは手を差しのべて来たのかなと、そこら辺はちょっと私にはわからないのですが、一方で高齢化率等のデータだけを見て、そんな所に住まないで都市部に降りて来たらと言うような、中央の偉い方もいらっしゃいます。私はそんな暴論を吐くより前にせめて「こうしてみよう」という方向に意識をフォーカスする取り組みを行って欲しいと思っております。

共助研もその一端を担いたいと思いますけれども、膨大な対象地域の存在を前にして、我々がすべてに飛び込んで何かやろうとする力量は、人数的その他により、あまりに微力でございます。そういったことから、私もどうしていいかわからない。そんなことを個人的には感じている次第です。このことにつきまして、シビルエンジニアリング、建設技術者の役割がどういうものなのか、今日のシンポジウムはこういったことについて、みんなで考える場になっていただければありがたいと考えている次第でございます。

これからの、当研究会へのご支援をお願い致しまして、今日は実りある一日となりますよう祈念してご挨拶に代えさせてさせていただきます。

Ⅱ．第１部　基調講演　＜宮崎大学　吉武　准教授＞

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました宮崎大学の吉武です。

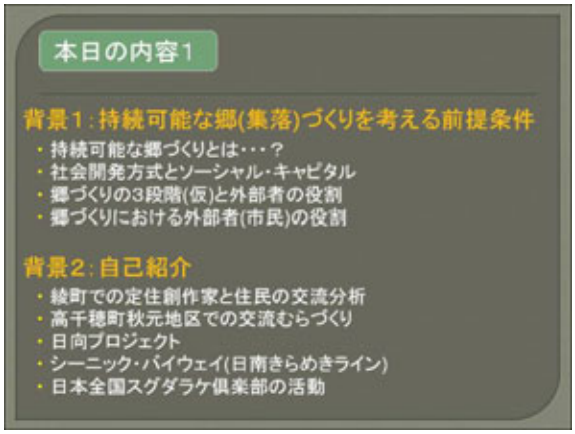
今日は農山漁村のお話ということで、みなさんいろいろと仕事ですとか、いろんな形で村づくりとか地域づくりに関われている方、あるいは関心のある方が来られているのだと思います。

私身も実践あるいは研究という形を通してやっていますが、たぶんこれが一般解だとも思っていません。こうやれば良くなるという答えにもならないと思っていますし、何かしらみなさんに「こういう考え方もあるな」とか、直接私の話でなくてもいいのですが、私の話を聞きながら「こういうやり方もあるかも」というアイデアの刺激ができれば、私としては満足かと思っております。

私がちょうど宮崎に移って１４年という話がありましたけれども、ある意味１４年ずっと関わってきた村づくりの話を今日は紹介させていただきたいと思います。

○　本日お話する内容１
・持続可能な郷（集落）づくりを考える前提条件と自己紹介

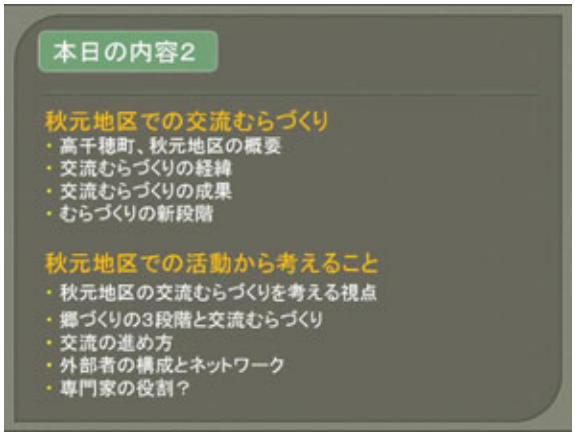
今日どのようなお話をするかというと、まず、村づくりの話をする前に、全体的に村の状況を私自身どう考えているのか、先ほど数字の話もありましたけれども、かなり状況が変わって来たのかなと思っていまして、そこの辺の全体的なお話と、先ほど「共助とか公助」とか、あるいは「自助とか互助」とか、最近は「新たな公」とかソーシャル・キャピタルとかの話があります。その辺の話を私なりにどう考えているか、少しお話したいと思います。



それから、「外部者」ここでは専門家とか技術者がどう関われるかという話ですが、広く捉えれば、市民として、都市住民といいますか、外部の人間としてどのように関われるかということで捉えた中に、専門家や普通の一般市民がいるわけです。今日は外部者・技術屋さんの話と、それから市民の２つについて少し話をしようと思います。

○　本日お話する内容２
・秋元地区での交流むらづくりと活動から考えること

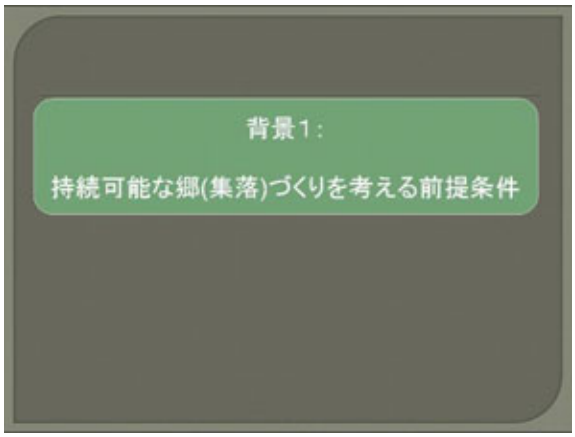
２つ目は自己紹介にも書いてありますが、私が何故こんなことを考えるようになったかということを、少し背景から、こういうことを考えてきたのですという話をして、その後で秋元地区でどういう村づくりをやってきたかということをご紹介させていただければと思います。



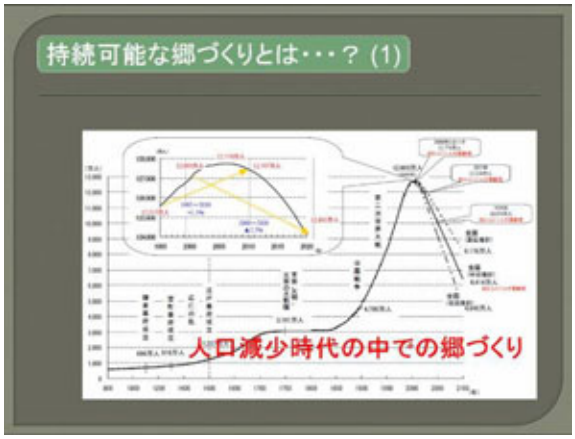
最後に、この地区でやってきたことを今改めて考えるとどういうことだったのだろうか。それから今日は共助研のシンポジウムということですから、技術者・専門家の人達がどのように関わって行けるのだろうかということを、私なりの考えを少しお伝えできればと思っています。

○　背景１：持続可能な郷（集落）づくりを考える前提条件
・持続可能な郷づくりとは…？

まず、前提条件の話ですが、これは皆さんには言われなくても分かっている話ですけれども、過疎の話というのは昭和 30 年代、古くは 20 年代からずっとあるわけです。全国総合開発計画の中で必ず過疎をどうするかという話はずっとありました。

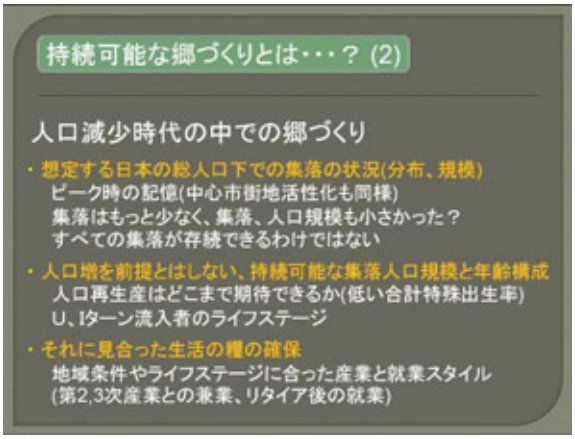


昭和 40 年代後半、50 年くらいから、つい最近までの過疎というのは、日本の人口が伸びて行った中での過疎なのですね。人口が全部伸びているけど、それが都市部に移ってしまうという中で起きている過疎だったのですが、今からは違います。日本の人口が今からはどんどん落ちていく中での過疎ということになる。もともと分母が減って行く訳ですから、ここはドラスティックに農村のあるいは何々県の人口を増やしましょうと話をしても、もう、そういう時代ではない。人口を延ばすことを第一義的に考えて過疎対策・地域対策をやるという発想は、そろそろ捨てなければいけない。減り方をどう考えるか、あるいは小さな中で均衡していくことをどう考えるかという発想をやっていく必要がある。これは、今までやってきた過疎対策とは全然別の考え方を今後はしていかなければいけないということです。



もう一つは、日本の国の人口が何人くらいの時を想定して過疎を将来見据えますかということです。８千万人の時だとするならば、第２次世界大戦前後ぐらいかもしれない。その時の地域の状況はどうだったのか。今ほど都市に人口が集中していないでしょうけれども、もうちょっと 100 年 200 年スパ

ンで言うと、たぶん今は集落の数はたくさんあるのだけれど、江戸時代中期、後期にそんなに集落はたくさんあったのか。実はもっと散発的に住んでいたのではないか。ちょっとこれは調べていないのでわかりませんが、あるいは、そんなに密集して住んでいたのか。



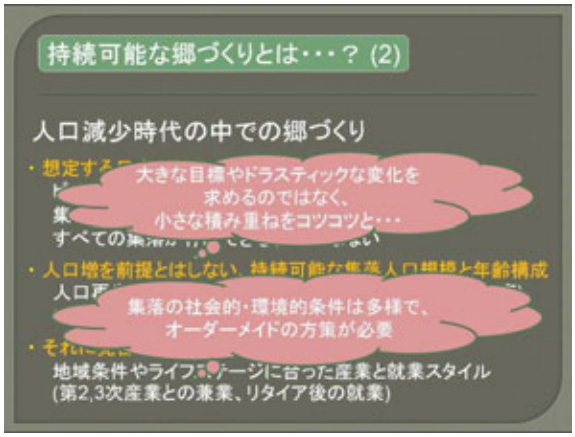
伝統だとか文化もとても大事ですが、例えば棚田で今指定を受けているものに、昭和初期のものもあります。そうすると例えば昭和初期、明治、大正をイメージする時に、我々がイメージする地域とか農村はもっと小さいものかもしれないし、人口が少なかったのかもしれない。この辺は地域の歴史をよく調べてみないとわからないですが、そういうことを考えないといけない。

想定する日本の人口を考えて、その時の規模とか分布はどうなのかと一度捉え直す必要があります。

昔はよかったという話は中心市街地活性化の時にもよく聞きます。たとえば「昭和 40 年代は良かった」という話はよく聞くのですが、ピーク時の記憶がみなさんにあるものですから、「あそこへ戻ろう」と。宮崎の観光もそうなのですけど、「あそこへ戻ろう」という話をするのですけど、どうもそのイメージを一回取払っていく必要があるのではないかということです。それが一つです。

そういう意味で人口増は前提にしないことを、どこかで一回覚悟しておかないといけないのですが、昔は一家に 4 人とか 5 人子供がいる時代の村と、今、合計の出生率が 1.4 前後の時の、だから I ターンとかUターンとかの若い人が来たとしても、それで子供の数が劇的に増える訳ではない。そうすると、そういうことが前提としてやる。

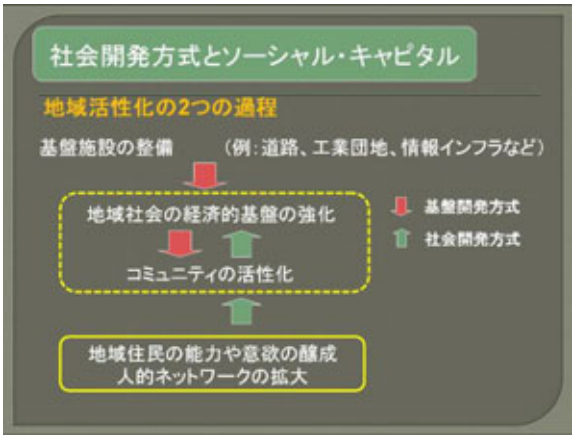
UターンとかＩターンもそうですけども、今リタイアしてからどこへ住もうかという人。あるいはリタイアをちょっと早めにしようという 50 歳代の人達。人口の再生産は望めないしょうから、そういうものを組合せながら、穏やかに町を維持していく。村を維持していく。こういう考え方が必要になる。このような人達が穏やかに維持できる位の生活の糧を得る。これは街に働きにいける間は街に通って貰って、おじいちゃんとおばあちゃんが農業やっているパターンもある。それから、リタイア後は子供の仕送りを宛にしなくてもいいくらいに食えることが目標かもしれない。その辺をどの程度の生活を組み立てていくための収入が必要なのかということも併せて、就業スタイルも併せて、考えていかなければいけないなと考えているところです。



以上の話は大きな目標とかドラスティックな変化を求めるというよりは、小さな積み重ねをコツコツと長くやるという話になってしまう訳です。

もう一つは集落の社会的な条件、環境的な条件対応で、ここでうまくいった方法をよそへ持っていこうとする話も難しくて、オーダーメイドになる。したがって、小さなことを持続的に長くやるけれど、すべてオーダーメイドということが、今日は申し訳ないのですが、コンサルタントの「業」として本当に期待できるのかということが、今日のこの講演の話を受けた時からの悩みな訳です。どういう風にこのことを考えようかと。

○　社会開発方式とソーシャル・キャピタル
・地域活性化の２つの過程：基盤施設の整備による地域振興とソーシャル・キャピタルによる活性化



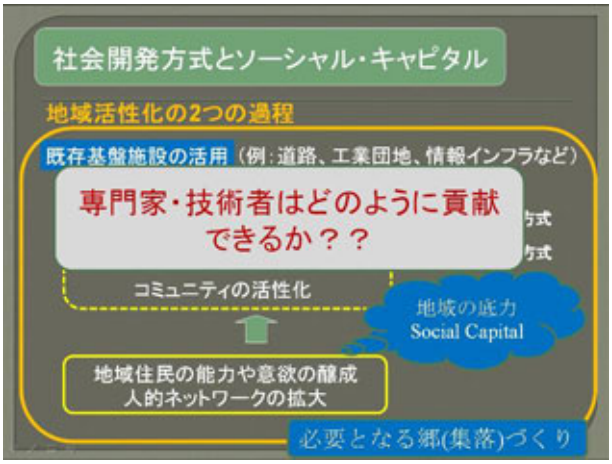
話を変えてソーシャル・キャピタルの話、どのようにいま村づくりを考えているのかという話ですが、この赤矢印の方が今までの地域振興の方法です。道路とか工業団地とかを作って、まずは基盤整備をすれば便利になる。それで工場が来るだろうし、あるいは物を出荷できる。だから経済が潤っていくから、コミュニティ、いわゆる村が持続するのだという考え方でやってきた。基盤開発方式というふうに呼んでもいいかもしれない。これが旧来の土木的な考え方です。

経済がずっと伸びているうちは、これで良かったのですが、現実は過疎の村の話をすれば、道路がきて便利になったら人口が減った。あるいは、「しいたけ」の出荷工場を作ったけど、農家がいなくなったというような話が現実には起きる。

これは何故かというと、今度は使う側のノウハウです。そこに住んでいる人達がどのようにその道路を使って自らの生活産業を組み立てるのかの訓練を全然していない。そこでのサポートがないまま道路だけ作っている。では週末帰れるからこの際街へ出るかという発想になってしまう。

緑矢印の発想は社会開発方式と言われていますけれども、まずは地域の人達の能力とか情報とか、ものの考え方とか、やる気とかにアクセスをして、そこを育てましょう。それからそういうことができるネットワークを拡大して、地域のポテンシャルを上げましょうということです。

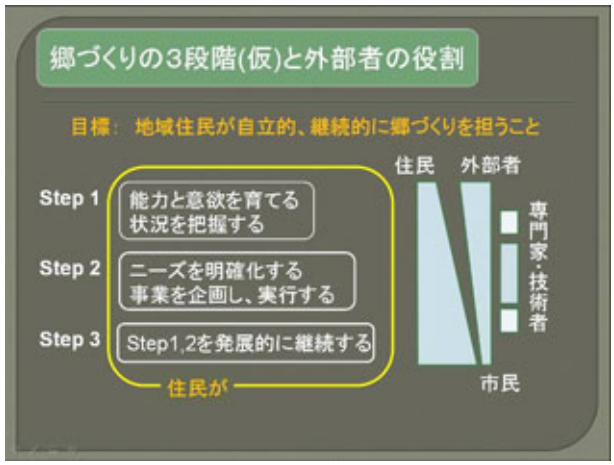
赤がだめで緑が良いという話ではなく、この両方が必要になる。ただ、今から新しく物を整備することはできない。そこで地域の底力ソーシャル・キャピタルを強化する必要がある。今から基盤整備が新しく出来ないということになれば、既存の施設をうまく活用するということが一つ。それから、もう一つは、活用しながら赤の方向と緑の方向をちゃんとやっていく。この両面で行くというのが、今から本当に必要になってくる郷づくり、集落づくりになるだろうということです。



問題は、私の関心はこの緑の方側をどうするのかということなので、今日は緑の話をしようと思っています。こういう中で専門家とか技術者はどのように貢献できるのか、赤矢印とか緑矢印でもどのように貢献できるのかということを考えなければいけない。地域づくりをどのように考えるかということを、昨日考えて３ステップに分けてみました。

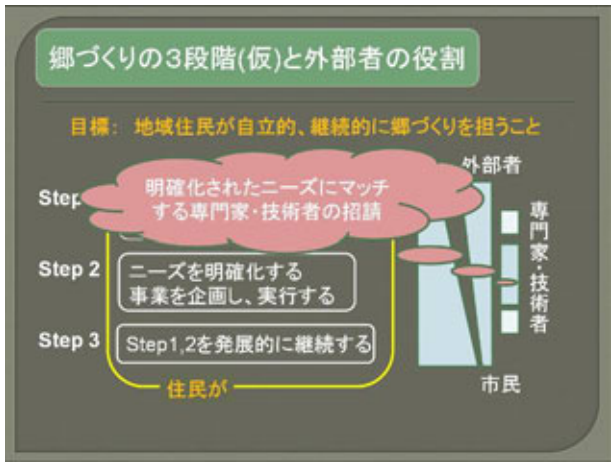
○　郷づくりの３段階（仮）と外部者の役割
・目標：地域住民が自立的、継続的に郷づくりを担うこと

目標は、よそ者というのはいつか去って行く可能性が非常に強いので、地域の人達が自立的に、これは新規に定住した人も地域の人なので良いのですが、地域の人達が自立的に、継続的に郷づくりを担い続けることです。

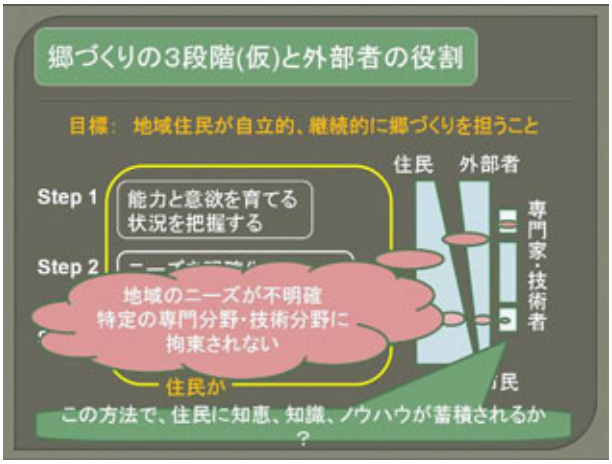


結果の良し悪しはおいておいて、まずは持続的に担うことを目標とした時に、ステップ１とステップ２とステップ３の３ステップがあって、まずはやっぱり、能力と意欲をしっかり育てる。それから自分たちが置かれている状況をしっかり自分たちで把握しなければならない。それでニーズを明確にするステップがあります。

何が足りないのか、何をすべきなのかということを把握すれば、事業を企画して実行することになります。それがうまく行く、行かない。それを継続的にステップ３で発展的に継続して行くステップになる。

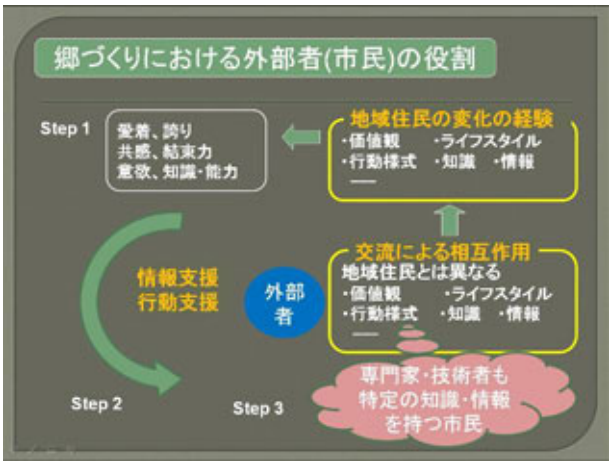


住民と外部者と専門家・技術者を右側に書いてみました。専門家・技術者というと、例えばコンサルタントの人にお願いしようとすると、ステップ間でどうしても切れてしまう。時々ステップ１にも関与して貰えることがある。ニーズを明確化すれば、こんなプロジェクトをやりたい。あるいは、ニーズを明確化してくれという業務をお願いして、企画をしてくれということで、メインは真ん中のステップ２になります。それが終わった後どうなのかというと、ステップ３で継続的に発展的に持続するという所になると、多分そんなに今までのように関与できない。この切れているのは、同じ人ではなくて、会社も違うかもしれない。したがって、なかなかうまく関与できない。



我々は、自分は何が足りない、何をするべきかというニーズが分かっていればその専門家を呼べる。それはニーズに合った専門家を選べばいい訳ですから。でも問題は、自分たちのニーズが不明確な段階がほとんどであって、逆に言うと、特定の分野の技術者や専門家が来てもしょうがない。そういうことに関わっておつきあいをしたい訳ではないです。という時期の方がとっても大事です。

○　郷づくりにおける外部者（市民）の役割
・Step１～Step3 の回路を回すために専門家・技術者を市民として考える

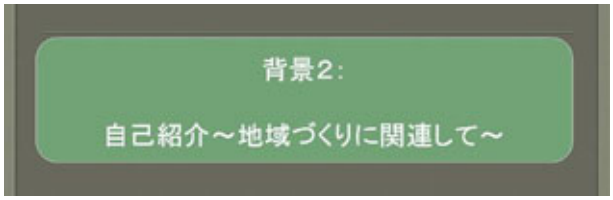


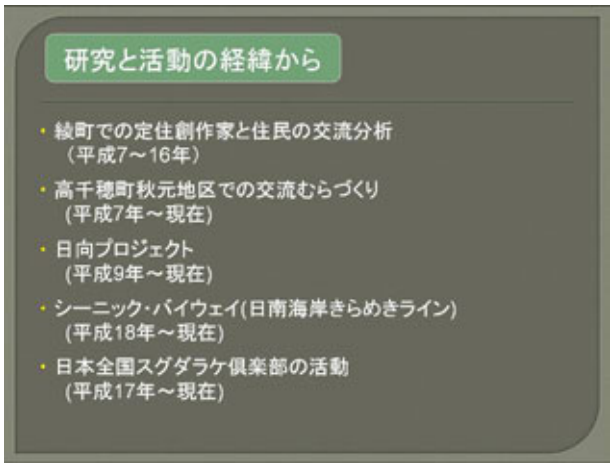
ここをどう考えるかということなんですね。だからこういう積み重ねをしたときに、地域の人に蓄積が行くか。外部の人の助けを呼んでもいいですが、その人達が去った後、自分達で何かできるような知恵とか、知識とか、ノウハウとか、あるいはやる気そのものが蓄積されていくかということを考えると、やり方そのものを考え直さないといけないだろうということなのです。

その時に外部者、市民と書いたのは技術者を含みます、そう言う意味で書いているのですが、これは外部者というのはいろんな価値観とか、ライフスタイルとか、行動様式とか、当然村の人とは違いますから、どうにかして交流という形ですれば相互作用が必ず起きる。けんかも時々しますが、そういう中で、「なるほど、自分たちがこう思っていたが実は間違っていたんだ」とか「こういう別の考え方をすれば気分が楽になることもあるよね」という体験をする。それが交流の効果だと思いますけれど。地域住民がそういう変化の体験。「そういう物の見方をするんだ」と感動とかびっくりとか、そういうことの中で、例えば彼らが「何もないと思っていたが、結構うちの地域って恵まれているよね」なんてことはよくある。外の人から「おたくの地域はすごく良いところですよ」と言われて改めて見直したら良かったというようなことが起きる。それは愛着だとか誇りだったり、或いは地域の人との相互の共感であったり、結束力につながっていく。あるいは「自分が何かをしよう」「この村をどうにかしよう」という責任感ともつながっていく。

そういう形でいけばステップ２とかステップ３の中に外部者は何かことを起こそうと思えば、情報だとか行動でも支援することが出来る訳です。ここをどうやって回すかということで、専門家や技術者を市民として考えれば、こういう回路というのは十分にあると思っております。後で秋元の話でこの話をします。

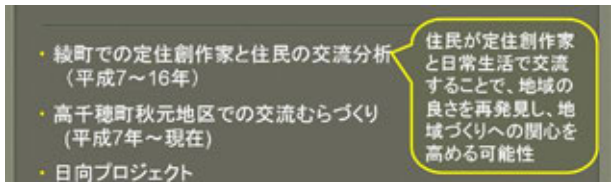
○　背景２：自己紹介　～地域づくりに関連して～
・研究と活動の経緯から



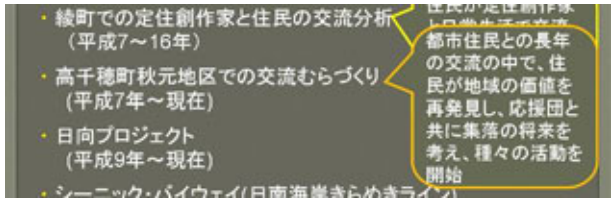


なんで私がこういうことを考えたかというと、宮崎に移りましてから、少し地域づくりということをいろんな角度からやってみたいと思って、綾町に行きました。そこでは芸術家の人達が、新規にＩターンで来てずっと住んでいて、その人達と住民の人が日常でおつきあいしている訳です。そうすると、これを実際に分析してみたのですが、住民が、定住している創作家と日常生活を交流することで、地域の良さを発見して、地域づくりへの関心を高めることが起き得た。先ほど言いましたけど、綾町は昔、夜逃げの村とまで言われていたけれど、自分の村は結構恵まれたすばらしい場所なんだということを、おつきあいの中で改めて確認

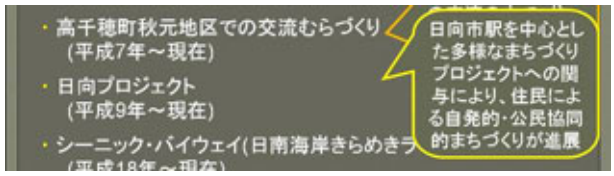
することが出来る。それによって「自分たちの地域を自分たちでどうにかしようという風な気持ちになりました」というような答えをする人たちが確実に存在する。そう答えたからすぐに実践に移る訳ではないのですが、そのうちのいくつかは実践に結びついている。



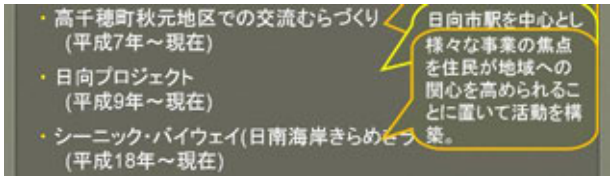
それから、高千穂の話は今日しますけども、都市の住民と長年の交流の中で、住民が地域の価値を再発見して、応援団（都市住民）と一緒に集落の将来を考えて種々の活動を開始し始めた。



日向は中心市街地という街の中の話ですが、日向市駅を中心とした、多様な街作りプロジェクトに市民が関与することによって、住民そのものが、自発的に官と共同して、街のイベントをしたり、実施企画が出来るようになって、今一緒にやっている。行政と敵対関係ではなくて、一緒にうまくやりましょうよという形で自主的にやれるようになってきている。

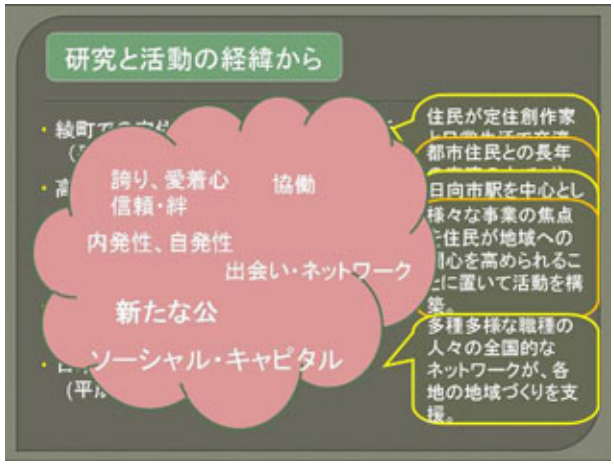


シーニック・バイウェイもありますが、日南海岸のきらめきラインでやっているのは観光を前面に出すのではなく、住んでいる人達が自分達の地域をしっかり見直して、お互いの関係をつくりましょうということに主眼を置いています。そのために、いろんな社会実験とか事業を持ってきていますけど、むしろ我々のフォーカスはコミュニティの方であって、地域づくりへの関心が高まっていくということが実現できそうだなというのがあります。



それからもう一つ「スグダラケクラブ」。

これはいろんな職種の全国に散らばっている人達のネットワークです。この人達が、情報とか、才能・知識・知恵を持ち合いながら、いろんな地域で行われるイベントなり、地域づくりに少しずつ関与している。今そういうことをやっている最中ですが、日南でもこの前やりました。できるだけ地域の人にくっつく形で支援するやり方で全国のネットワークとしてやれる。これもボランティアのネットワークです。



このようなことをずっとやっていると、先ほどの、誇りとか、愛着心とか、信頼とか内発性、自発性、共同、出会いとかネットワークというのは、それこそ今言われている「新たな公」の話であったり、ソーシャル・キャピタルの話です。ずっとこの綾の話は平成７年くらいからやっていたのですが、結局今のこういう状況に全部集約される。いろんなことをばらばらにやっていたことがここに来てやっと私自身も繋がったということです。

○　秋元地区での交流むらづくり

・高千穂町、秋元地区の概要：位置、社会、人口

今から秋元の村づくりの話をします。

九州の中でいっていますので、どこにあるのか改めて言う必要はないですが、丁度県境、大分、熊本、宮崎の県境の真ん中にあります。人口的に言うと３万人弱をピークとして、どんどん町自体の人口も減っている。赤で引っ張っている 2005 年時点の予測がこのまま下にひっぱってあるのですが、町自体がこういう状況にある。

秋元という地区は、ここ辺が街の中です、南へずっと降りていって諸塚の山の境になります。そこの一番奥の集落になります。

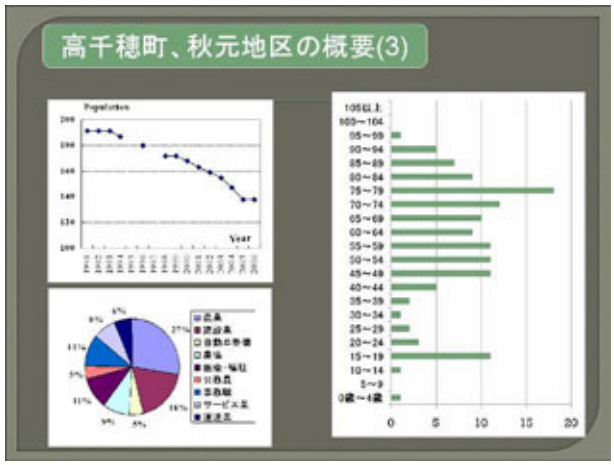
町の中心部から 12 ㎞で、車で地元の人はたぶん 20 分で行けますが、道がすごく曲がっているので初めての人はもう少しかかります。というところにあります。

ここが冗談でいつも中心市街地と呼んでいる場所ですが、商店がここに１軒だけあります。

どういう場所かというと、小さな村ですから、昔から一緒に農業も含め、比較的共同作業が多い村で、何が有名かというと夜神楽ですね。この神楽があるというのはいろんな意味があって、もちろん伝統であるということもあるのですが、ほとんど村の人が総出でないとできないのです。神楽宿という神楽が舞っている場所もそうなのですが、実は各家では別に接待宿というのがあって、おもてなしをしている。だから村全体がやらないとできない祭りです。そういう意味でも非常にチームワークが良い。

自然は非常に豊ですし、神楽だけではなく他の祭りもあります。共同作業、それから、みんなが一緒に楽しむ、今はほとんどないと思いますが、地区の人がバスを借りて旅行することをまだやれている村です。それから世代間、男性、若手、中堅、お年寄りとか、女性中堅とかそれぞれグループがあって、グループ活動をやっています。

人口をみてみましょう。これは 2006 年までですが 120 名、世帯が 50 軒です。何となく止まっているように見えますが、ここで（2006 年）130 くらいありますから、120 まで落ちています（2010 年）。こういう形で徐々に減っている。どういう年齢構成になっているかというと実はおもしろいのはこれです。

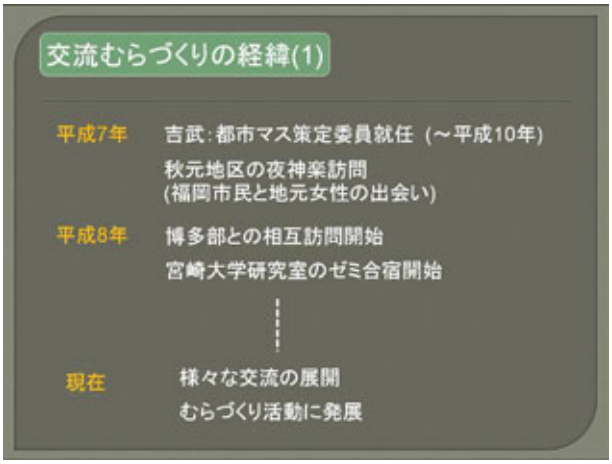


30 代と幼児、ここが非常に特徴的でここが 1 人とか 2 人なのですが、最近人口が増えたと我々も喜んでいますけどちょっと変わった村です。

これは 65 歳までの職業です。ですから皆さん勤めに出ています。高千穂の町まで。65 歳までですが、実はみなさんこの裏には農業が全部隠れています。農林業が全部隠れていて、それプラスという形でリタイアされれば農業側に回る。こういう集落です。ですからこれはある程度通勤可能な距離での村の話ということになります。

○　交流むらづくりの経緯（1）
・主なできごと、イベントの紹介

どういうことが起きているか、やってきたかというと、平成 7 年に私が宮崎大学に移りまして、その時ちょうど高千穂の都市マスタープランの仕事があったので、3～4 年通いました。それが縁でその仕事が切れても通っているということなんですけども、ちょうど平成 7 年の秋に「神楽があるからいらっしゃい」といわれて、博多から向こうに移ったばかりでしたから、博多の街づくりグループとか、いろんな私の知り合いの人達を呼んで、一緒に行ったわけです。そこで博多の女性の人たち「ごりょんさんの会」の方々と地元の女性達が意気投合して、お互い行き来しようということが始まりました。



それから平成 8 年には相互訪問ということで、「山笠があるから水かけツアをしよう」と言われて、みんなで行って、平成 9 年からは秋元の男たちが山笠に参加し始めた。それからうちの研究室が年間 1 回ぐらいゼミという形でそこに合宿してやる。いろいろな展開を後でお話しますが、現在まで様々な形の交流が続いています。

写真ですけど、これは「山みせ」の時です。（山笠に）乗っているのは高千穂の秋元の人たちです。あり得ないことが起きているのです。行って乗せてもらえる訳はないのですが、なぜかこういうことが起きてしまった。男はそうですが、女性達は、今度は博多の街部の家にホームステイさせて貰って山笠を見ている。当然ですが夜は交流会。秋元地区の人達と一緒に交流をしようといって、山笠の方や博多・

秋元の女性達も一緒に交流会をやっている。

我々の仲間に音楽家がいます。村の人は、じいちゃん達はクラッシックなんか聴いたことがないと言うので、今度は普通の民家です。チェンバレンという楽器を博多から持ち込んで、コンサートをやっている。この時は村の人だけでなく、高千穂の街とか延岡からも来ました。

それでみなさんがもてなしをするわけです。企画も全部地元の人がやる。終わるとこの集落の良い所は全部飲み会になることです。中の人、外の人が混じり合って全部飲み会にしちゃう。実はこれは外の人のいるなかでの交流会です。これが終わったら、みなさんが帰られた後に地元の人の飲み会になります。

16 年位から、うちの研究室が合宿という形でみなさんと交流が続いたのですが、そろそろただの交流会も楽しくないよね。ワークショップをやろうよということになりました。我々の仲間の建築士の人にお願いしてむらの人､外の人が混ざってＷＳをした。宮崎県庁やうちの学生も参加しました｡この時は｢東京からお客が来ました。2 泊３日でもてなすというコースを考えてください｣というタスクを与えて、ただ聞くだけではもったいないので､｢今日の昼飯はインタビュー先でゲットしてきてください｣というタスクを与えて、畑からいろんな物を持ってきて貰うというやり方のワークショップです。地元の人と地元の子供も全部入れて、ワークショップで村の将来を考えてみようではないかと。

やはり夜は飲み会です。良いのは地元の子達もここにいて、うちの学生がここにいて、地元のおじさん達もここにいて、おじいさん達もどこかにいるのですが、入り乱れてこういうことをやる。このとき村作りをどうしよう、何をしようなんてことを考えてやっている訳ではない。そういうゴールを作ることを目標にしてない。

ただその中で、こうやって飲んでいる間に「あれよかったな、ちょっとやってみようか」という話は飲みながらしていて、翌日まで覚えていたものは少し形になっていくのですが。そういう形で無理しないでする。もう一つは、後でうちの学生さんにちゃんと報告書を作れといって。これを村で回覧して貰って、そうすると、来てない人達、おじいちゃん、おばあちゃん達がいますから、回覧したら泣いて喜んでもらった。｢うちの孫がこんな立派のことをやった｣。孫達は「自分たちの地区だけど知らないことがいっぱい分かった」と喜んでいました。

この辺は地力と言いますか、底力を着ける段階として、こういう一見なんでもない、目標を定めない、楽しみながら一緒にやって、わいわいやっている所の段階が、実は非常に大事なのではないかと思う。

後は、この後ろ姿は私ですけど、だいたい稲刈りになると何人かを結成して、行って、地元の人たちの所へゲリラのようにダダダと行ってパッと助けて、終わったら次の田圃に行くという形でやっています。我々としては楽しみなんですね。向こうの人は、陰干しは、手間がかかりますからこの作業の手伝いをします。

昼ちょっとこうやって庭でカレーでも食べながら「今日は楽しいね」っていう話を外の人と中の人が一緒になって雑談をする。

こういうことをずっと続けてきたのですが、大きな台風があって、高千穂鉄道が全部落ちた時ですが、川が氾濫して、改修工事が終わった時に「何かやろうか」ということを村の人たちが自分たちで決めて川祭をやる。やるためには、いろんな子供達が街からいっぱい来て欲しいということで、魚を放流して釣り大会、それからつかみ取り大会をやりました。

これはそのとき私が一緒に仕事をしていた国交省の人ですが、公民館でワークショップをやって、子供達とか、村の人達とか、いっぱい来た子供達を何班かにわけて、「ほら水きれいでしょう」とか「これぐらいするとこんなに汚れるんだよ」とキットを使って一緒になって勉強して貰った。

それで、終わったらやっぱり打ち上げですけど。我々応援団が、東京からとか福岡からとか、宮崎から、いろんな人がここに入って、うちの学生もいて応援団で、地元の人たちもいて、終わったらやはり打ち上げする。

この前ちょっと聞いたんです。いろいろ物販もしますから「もうかった？」って聞いたら、いや、公民館で積立てるお金を使ってやっているだけで、「とんとんかな、若干の赤だよ」。「なんでやっているの？」「いや、こんなに子供達が来て、おじいちゃんおばあちゃん達が楽しい。子供達がたくさんいる風景を見られるということだけでいいじゃないか」「今日一日幸せな気分になって貰えればそれでいいじゃないか」という言い方なのですね。

これが商業ベースで儲けようと考えると、こういうイベントには多分ならないと思う。何を目標にするかというのは、今のところまだ余裕がある。人口は減っているけれども。その中で今お年寄り達をどうやって楽しませようか。あるいは自分たちがどうやって一つのことをやって結束を高めていくか。この結束は次のステップへ行く為には実は非常に重要なのですけれども。そういう形で言われている。

去年の夏くらいに、無人販売所を作ったのですが、

これが月に 20 万円の売り上げになっています。ちょっと秋元という集落の露出が多くなってきて、有名になってきたということと、今スピリチュアルブームなんですが、有名な神社がありまして、そこにくる客が増えたということもあるのですけども、こういうものを今組み合わせて、新しいプロジェクトが、今度は本当に具体的な産業関連プロジェクトが、今やっと始まった段階です。

これが全部交流の成果という訳ではないのですが、いろんな要因はあると思いますけど、我々が平成 7 年から関わってから平成 21 年のオープンです。こんなもんだろうなとは思います、時間というのは。Uターンした子がプロデュースして、村のホームページも始めて、その方の奥さん達若手がこの企画を担っています。

○　交流むらづくりの経緯（2）

・平成７年１１月～平成２１年１１までのやってきたことの年表を作成してみました

改めて年表を作ってみました。字が小さいのでわかりにくいかもしれませんが、平成 7 年から平成 21 年の夜神楽まで、11 月つい最近まで、このくらいのことをずっと、ここに載ってないものもあります。ここに上げているのは少し団体戦でやったものです。

夜神楽と山笠の行き来は、伝統的な祭としてあるのですが、山菜ツアーとか稲刈りツアーとか、田植えとか、途中から東京の大学生のインターンシップを受け入れて村の生活を体験してもらう、グリーンツーリズム系の活動を入れている。それから、交流のイベントということで研究室の合宿もやっていますし、コンサートをやったり、さっきのお祭りみたいなものをやる。

あと相互扶助ということで、実は私の知り合いが福岡に山小屋持っているのですが、そのメンテナンスに村から出て行って手伝ってもらうとか。稲刈りもそうですが相互扶助ということをやっている。

うちの研究室は、ここで集落の営農の話もあり、支援を受けるということもあったので、研究室とこの集落が交流協定を結んで、この環境をフォーマライズしている。

やっている内容は昔から何も変わらないのですが、一応ここでフォーマルな形に説明ができるようにもしています。

中を見ると、初動期とお互いの関係をきっちり作っていく時期と、それから目標を定めて行こうかという時期と、それから今は具体的にプロジェクトに起こして行こうという時期の 4 つに分かれるのではないかと思っています。

○　交流むらづくりの成果（１）
・最初から交流の目的が明確だったわけではない…

どういう段階になっているかというと、目標とか目的というものを、そんなに定めていない。最近になって少し明確化しましたけれど。やっぱり現時点での目標であり、目的ですから、また２，３年すると変わってくると思いますが、目的はあまり明確にしたわけではないけれども、こういうことが起きた。

これは 11 年です。もちろん私の友人ですけれども、正月の 2 日にこの家に泊まっていましたが、西日本新聞にこういうことが載りました。「交流が何もないと思っていたこの村に住む自信を与えてくれた」。博多の人達と交流することによって「当たり前と思っていたものが、本当に価値があることを教えてもらった」「すばらしい土地に住んでいるんだという誇りが生まれた。都会でも田舎でもそこに住む価値ということを見出せれば幸せではないですか」、交流ということはこういうものなんだっていうことを平成 11 年にこの方が明確に言ったわけです。

我々が何かことを起こすとか、物をつくるとか、そういうことよりまず最初にやらなければいけないのは、この体験を村人に、できるだけ多くの村の人達にして欲しい。反対側で言うと、我々もしたいわけです。我々もこういう感覚が欲しい。やはりここと交流し続けるエネルギーというか、交流の意義が明確化されたのはこの時期だったのかなと思っています。

○　交流むらづくりの成果（２）
・おりおりのみんなの声を拾いあげて分類

時々ワークショップの中で、あるいは個人的に行って、みんなの声をその時点その時点で拾い上げる作業をしていたのですけど、平成 14 年より前は、例えば博多と交流して、博多の街部ですから、過疎化、高齢化、伝統というキーワードは一緒なのですね。「何だ、悩みは一緒じゃないか」という共感が博多と生まれた。都会の人だからとっつきにくいのではないかということが解消した。

それが分かったら、今度は、自分たちは、夜神楽を真剣にやらなければいけないと思った。やっぱり自分達の伝統は自分たちで守らなければならないのだから、真剣にやらなければならないというふうに思った。自分たちの村のことをちゃんと考えなければならない。それから、自分たちがやったことは村の人と分かち合いたい、教えあいたいと思った。今まで何もないと思ったけど、非常に大切だと思った。コンサートをやったので自信がついた。それからすばらしい村であることがわかった。子供達がやった

ことに感動した。子供達はすばらしい力をもっていると確認できている。

これはソーシャル・キャピタルの規範とかいろいろあるのですが、Bonding というのは Bo と書いていますが、自分たちの地域の中の結束力を表す言葉です。Bridging というのは外と繋がるということですけど。共感とか責任感、発見と自信、感動がここで起きている。規範と Bonding。

これは二期の頃なんですが、人と人の関係を持てるようになった。誇りもあります。住むことの意味も理解できた。といいながら、収入源がないから後継者がいないとか、人口半分になるな。収入が必要だよな、でも結局交流なんて楽しみだけではないかという批判も出てくる。でも、我々には交流によって培われた人的ネットワークはあるし、外の人の力を借りてでも守らなければいけない。交流によって得た人的ネットワークはアドバンテージである。村にも商品になりそうなものがある。心配だけではなくて、将来への懸念と、もう一つは資源に対して意識が向き始めている。

将来の不安というものから少し経済的な思考、これは自由発言としてのヒアリングなのですけども、交流は財産であるということが言われている。

将来的にどうするか。ここで信頼という言葉が出てきて、外の人との関係が、いわゆるネットワークでありコミュニティであるという Bridging の考え方に変わってくる。

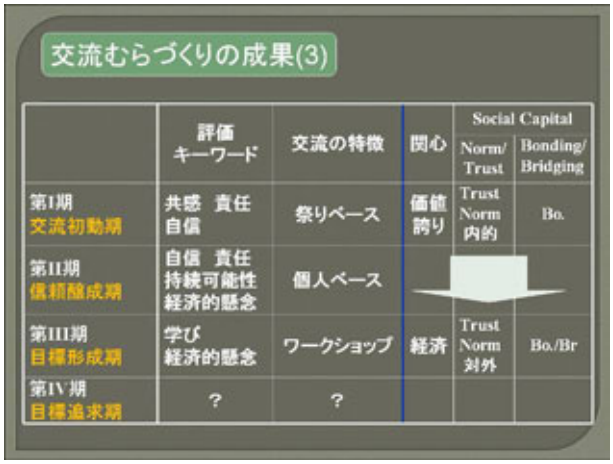
最終的に 19 年の 3 月にやったのですが、「生活に張りを与えてくれた」とか、「高齢者の生活に張りがでてきた」「結局交流って自分自身を知ることなんだよね」というふうに到達してしまった。「交流とは学ぶことなんだ」というレベルに到達した。こういう形で集落を守るんだ、「人生の目的は集落を守るんだ」となった。

集落の変化、高齢者、お年寄りの方々もこの交流に巻き込まれていった。その中で自信と責任感。それから将来を見て、経済について思考をする。そうすると、外の人との関係も少し見えてきた。

この後の、今現在進行形の実現期はまだまとめてヒアリングとってませんで、今年また何かしようかと思っています。

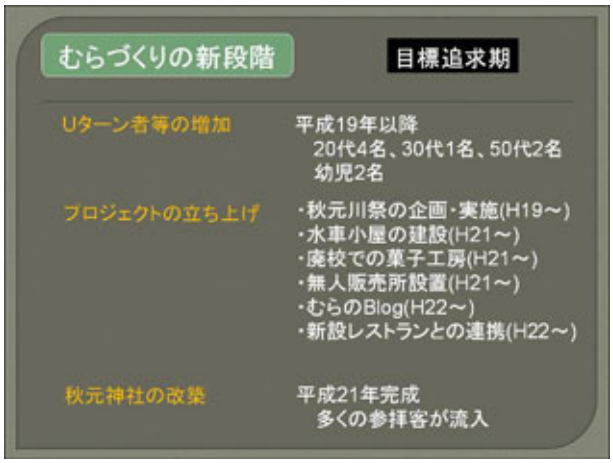
これをまとめると、第 1 期から第 4 期、交流初動

期から彼らが自分たちで言っているキーワードが共感、責任、自信と少し経済的な概念。ではこの辺をどうするのか。交流は祭ベースでやっていたのが個人ベースになってワークショップやって、今は少し多様化している。これに基づいて、少し経済のことについて関心をちゃんと考えることができます。それから、内的なものと外へとの繋がりということが意識されるようになってきた。これが十数年の間に出てきた変化としての底力なんだろうなと思っています。



○　交流むらづくりの新段階
・U ターン者等の増加とプロジェクトの立ち上げ、及び秋元神社の改築

では今、どういう状況にあるのか。U ターンが少し増えてきました。人口は減っています。だけど、19 年以降 20 代 4 名、30 代 1 名、50 代 2 名、幼児 2 名増えてきた。これは今までなかったことなので、喜んでいます。



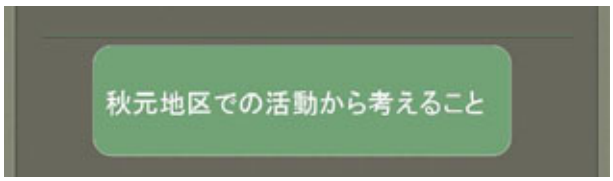
それから今何をやっているか、さきほどの川の祭りも 19 年からずっとやられていますが、水車小屋を今建設している最中です。この水車を作るにあたっては、実は東京のデザイナーのアドバイスを頂きながらやっている。これも交流のネットワークです。

廃校、小中学校が無くなったのですが、そこで今、利活用としてお菓子工房を立ち上げている。それから先ほどの無人販売所。村のホームページを今月中には立ち上げるはずです。今準備をしています。

レストランを春くらいから街部で、そこに少し産品を出したりします。実はいろんな補助金が、このプロジェクトについては絡んでいます。プロジェクトにしたら 1 つ 1 つ、こうなのですが、このバックにあるポテンシャルの方が、これを十分自分たちの内発的なものでこなせるようになってきたということです。神社の改築もして少しお客も多くなりました。ここに来る人も増えてきた。

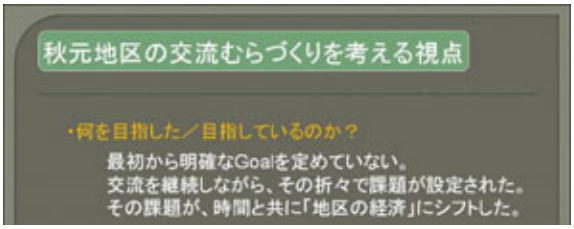
○　秋元地区での活動から考えること
・秋元地区の交流むらづくりを考える視点

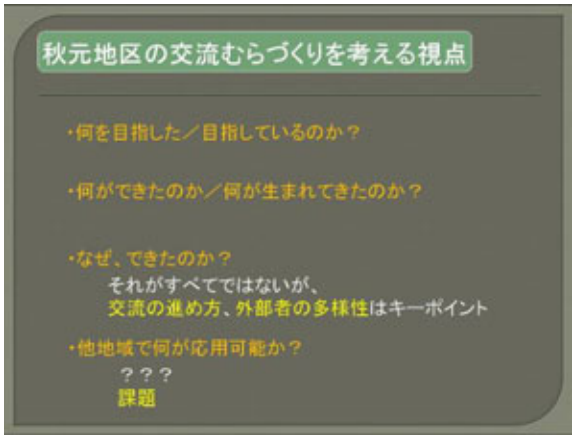
何を目指したのかというと、明確なものは定めてなかったのだけども、交流を継続しながらだんだんと課題が明確になって、その折々で少しずつ課題があった。それが経済ということに、だんだんとシフトしていったのかなというふうに思います。何ができたのかと言うことですが、そういう意味ではソーシャル・キャピタルを内と外の中でちゃんと形成できたのではないか。それに基づいて活動してきた。

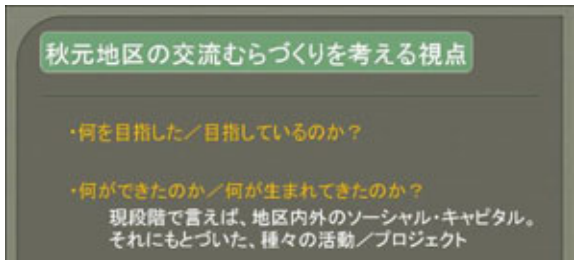


なぜできたのか、ここはいろんなやり方があると思うのですが、それから、交流だけが原因ではないと思っていますが、進め方と外部者の多様性というのが１つのキーポイントだったかなと思います。

これが他所の地域で応用可能かと言われるとわかりませんが。



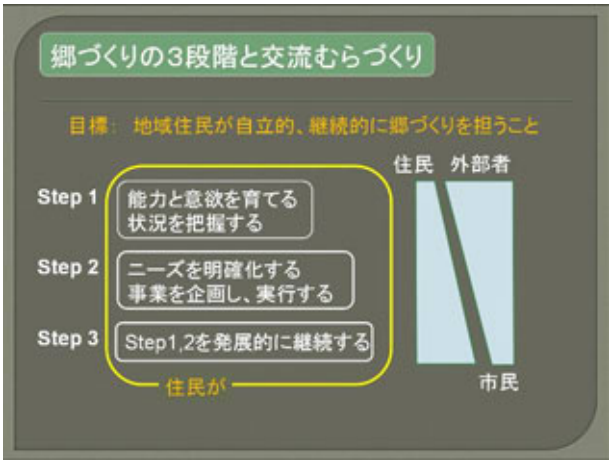


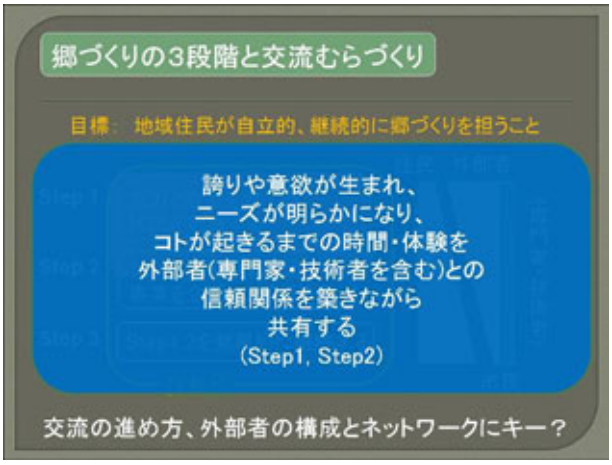


○　郷づくりの３段階と交流むらづくり
・目標：地域住民が自立的、継続的に郷づくりを担うこと

先ほどの３段階で言うと、秋元でやってきたことは、このピンクのところで、もう１つは、この専門家と技術者を内側に入れ込む、ボランタリーベースで。こちらですね。さっき市民の外側に出しておきましたけど、あれは業務としてですが、ボランティアとしては内部に市民として入れてこれをやってきた。

これが秋元の特長だと思っています。秋元の特長だから誇りと意欲が生まれて、ニーズが明らかになって、コトが起きるまでの時間と体験を外部者と信頼関係を築きながら共有した。ということで全然だれも無理をしていない。だれかに引っ張られてないので、むしろステップ１の方をやってきたら、ステップ２になってきたのかな。



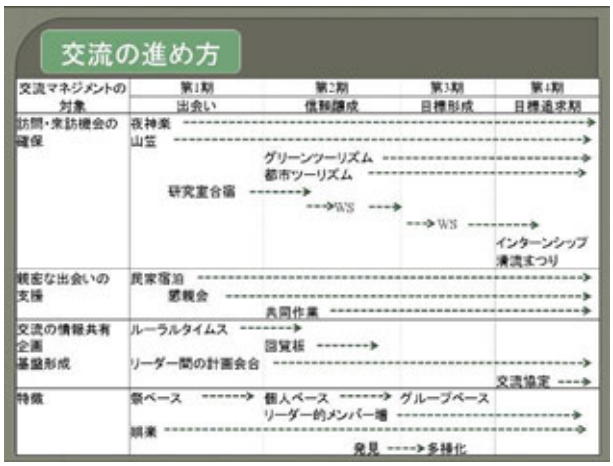


○　交流の進め方
・何をやってきたのかを年表にしてみました

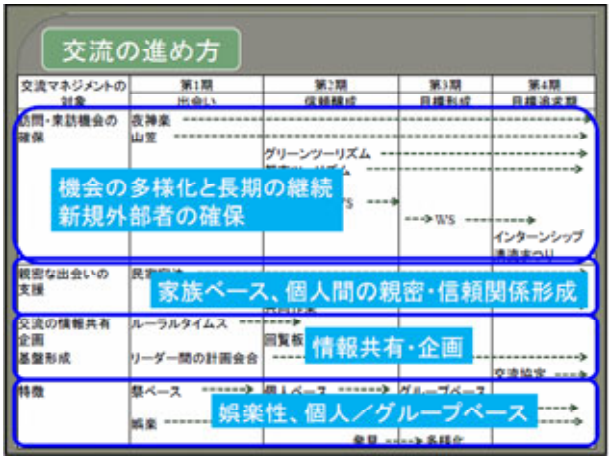
ということで交流の進め方とかネットワークとか気になるかもしれないと思って、何をやってきたのかこうやって全部年表にしてみました。

特徴は起きたことがズーッと最後までほとんど繋がっている。合宿がワークショップに変わっていますが、多様なものが全部繋がって、やってきたということです。

これは、いろんな機会を増やしていった。単発的に稲刈りツアーとかありますけども、とにかく機会を多様化して、長く続けることを実践出来ている。



それから、新規でやることもありますけども、いつでも新しい人達も、仲間のように入ってきている。続いて貰える。もう１つは、そういう人達はみんな民家に泊まったんです。それぞれ分宿してやる。それと飲み会です。結局我々も行く時は家族ベースです。家族で一緒に行って、家族の家に泊まって、個人間ですごく密接な関係を作る。みんなが都会の人が集団で公民館に泊まるわけではなく、みんなバラバラに止まって各家庭でおじいちゃんから娘まで全部含めてその家庭と話しましょうよという環境を作った。



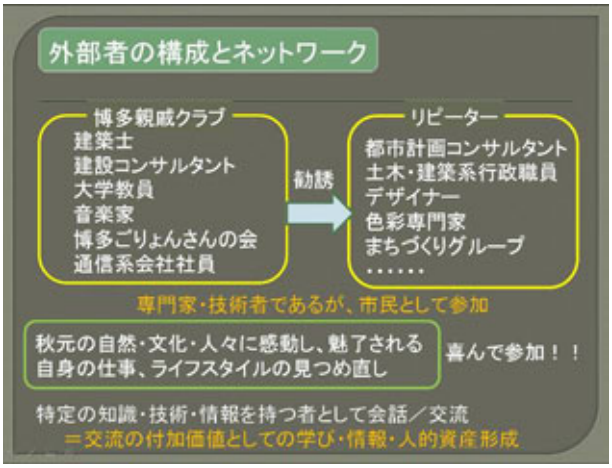
それからもう１つはできるだけ情報を共有するということで、うちの研究室はホームページで、ブログで時々こういうことを発信していますけれど、情報を共有したり企画するということをやっている。

後は、楽しまなければダメだってことといろんなグループベースでやっていく。個人ベースとグループベースを組合せてやっていくということです。

○　外部者の構成とネットワーク

・専門家・技術者が市民として参加することで、交流の付加価値として学び、情報、人的資産形成

外部者のネットワークは、我々はコアになっている人達は博多の「親戚クラブ」。親戚のようにつきあいましょうねということで名付けています。



結局こういう人達が持っているネットワークで新たに巻き込んだ人が非常に多い。結局プロです。だけどプロとしての知識をそのまま下さいと言うのではなく、一緒に遊びましょうよ、作業しましょうよ、一緒に楽しみましょうよ、という時にこういう人達が多かったということです。

こういう人達は、やっぱり独特のセンスを持っていますから、続くんですね。楽しいと思って。こういう人達は感動して魅了されて、実は「俺は都会で何をやっていたんだ」と自分達が落ち込んでしまうくらいカルチャーショックを受けたわけです。だから喜んでいつでも参加してくれる。

ただし、技術者は特定の情報を持っていたり技術を持っている人達ですから、普通の会話ではない。

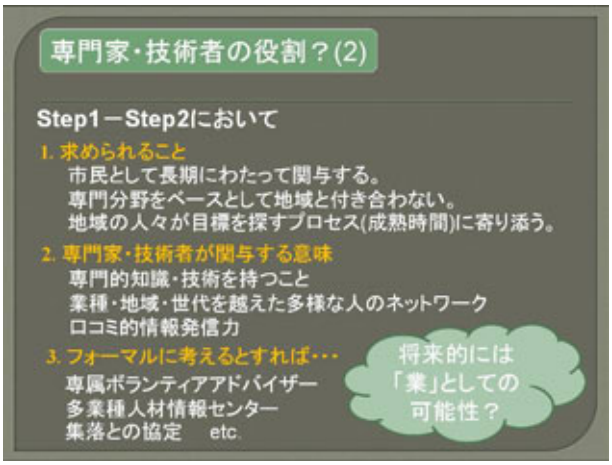
そこには経験に裏打ちされた会話がある。そういう形のもの。だから、これが交流の付加価値としては、ここ辺で学びとか情報とか。もう一つはこういう人達を我々はいつも、私設アドバイザーとして、私のアドバイザーとして持っているという形を今作っている。「今度こういうことをやろうと思うんだけど」と村の人がアドバイスしてよとメールや電話ができる相手が東京とか、福岡とか、宮崎とか、いろんな所に散らばっているわけです。

○　専門家・技術者の役割（１）
・多様な参加と交流

キーワードをちょっと並べてみたのですが、これは時間がかかるだろうなと思っています。やっぱり同じアドバイスをするんだけども、同じ内容かもしれないけど、ちょっと来てちょっとするアドバイスと、長い間一緒に行動を共にしながらするアドバイスとは、言葉が一緒でもたぶん違って、そこは信頼がある。そのためには家族ベースの交流と、ボランティアが自発的な活動としての交流をやってきた。

それから学ぶということについては、もちろん地元側からすれば、こういういろんな世界で自分たちと直接関わり合いのないようなところで仕事をされている人達が来て、そういう人と話をするのはとってもおもしろいことだけど、逆に外から来る人にとってみれば、この秋元は非常に魅力的です。それから人が魅力的なので、そこで学び合うということ。それから楽しいということ。行ったらおもしろい。それからもう一つは早急な時間を求めない。これはできるペースで時間をかけてやればいい。子供が受験をするとか、家庭の事情もいろいろありますし、それから、住民が心から納得しないことをやっても、形はできるけども心がついて行かないということもある。もちろん、ただリーダーという存在は大きいと思っています。

○　専門家・技術者の役割（２）
・求められること、関与する意味



ではこれで最後ですけれども、今日私が、この経験から言えるのは、専門家・技術者というのは出来るだけ長期にわたって関与というか、「寄り添う」という言葉を僕はよく使うんですけども、そこにずっといる。物理的にいるかどうかは別ですが、気持としてそこにいるというふうに思って貰えること。

それから、こちらもそうだと思うのですが、その成熟時間をずっと一緒にやる。専門から物事を始めるのではなくて、ニーズがあれば専門の話はするけども、むしろ、専門より深いメタなレベルのところの能力がとても必要なのではないか。

もう一つは、とはいえ専門を離れてとは言うのだけれど、やはり専門的な知識を持っているという所はメタなレベル。それからネットワークを持っているということは非常に強いです。その話だった

らいい人紹介してあげるよというのは、結構この業界にいるといろんな人知っていますから。あの人だったらこの村を好きになってくれそうだなとか、頭の中のリストを探すわけですね。自分の中に入っている、頭の中にある人材ネットワークは、技術者の人にはすごく多いはずです。これを使う。

それから、もう一つはこういう人達が、あすこに行ったらおもしろかったよ。とクチコミ的な情報発信力を持っていて、それが実はこの村のブランド力に繋がっている。情報発信をやってもらえる。これは非常に大事なことだと思っています。

これは結局ボランティアベースで個人みたいな話になるのですが、せっかく共助研のシンポジウムですからフォーマルに考えなければならないかなということです。さっきのクエッションマークの所ですが、「専属ボランティアアドバイザー」はどうでしょう。長くやれるかな。一人一個やっておけばいいのですけれども。

それからあるいは、これはフォーマライズすればやっぱり人材を紹介してもらえるバンクが必要だろうけれども、やっぱり相性もあるから、そこの集落だったらこういう人がいいかなってことまで見抜いた上での紹介が出来ればいいと思います。それからもう一つ、うちの研究室がやっている協定みたいなものがあるかもしれない。

どうもやっぱり後半になると、わざとすごく薄い色にしていますけども、将来的には「業」になるのかなと、ちょっとわからないですが、時代が変わっていくところを本当は「業」にしていくということも大事だと思うんだけど、先ほどの秋元もそうなんですが、明確な目的をあらかじめバチッと定めていくということを目的とすると、イベントを儲ける目的にすると、儲けなりのイベントになってしまう。儲けないって所で初めて良いイベントになるということもあるから、あまりここは強く意識しないけども、意識しながら、実践していくというのが、一つのやり方かなというところです。

これが答えになっているような、いないようなところですが、私の発表はここで終わりにさせていただきたいと思います。

ありがとうございました。

Q&A

Q：前半は外部交流を含めてやられていたのが、後半は集落の方で自立的に動かれている色分けになっていると思いますが、そういうふうに認識されておられるのかということと、どのようなことがターニングポイントであったかを教えて下さい。

A：　自立的になったなと本格的に自覚したのは、川のイベントです。19 年です。台風で大きな災害を受けた後に、改修工事が終わって、川のイベントをやろうと。

僕は全然考えていませんでしたが、地元の人達がこういう機会だから、ただのお祭りではなくて、人が来るイベントにしなくてはいけない。私は何の相談も受けていません。イベントをやるから、何月何日当たりなんだけど、研究室でワークショップを１個やってくれと頼まれただけです。

そんなのではおもしろくないから、人を呼んでお手伝いします。ワークショップもします。といって、お願いですから手伝わせて下さい。というような話です。

昔は意識して仕掛けたことはありますけど、定常化してしまえばそれは毎年やるものですから、あとはタイミングを一緒に企画する程度で、改めてネゴシェーションやらなければいけないわけではない。今年もやるよね、ということで軽くなった。その分が今のような地元の人達の関心が川祭りであったり、あるいはプロジェクト立ち上げのところとか、その辺に移ってきている。交流はその後ろに隠れていて、そのアドバイスを、必要に応じて様々な人がやっているということです。

Q&A

Q：前半は外部交流を含めてやられていたのが、後半は集落の方で自立的に動かれている色分けになっていると思いますが、そういうふうに認識されておられるのかということと、どのようなことがターニングポイントであったかを教えて下さい。

A：　自立的になったなと本格的に自覚したのは、川のイベントです。19 年です。台風で大きな災害を受けた後に、改修工事が終わって、川のイベントをやろうと。

僕は全然考えていませんでしたが、地元の人達がこういう機会だから、ただのお祭りではなくて、人が来るイベントにしなくてはいけない。私は何の相談も受けていません。イベントをやるから、何月何日当たりなんだけど、研究室でワークショップを１個やってくれと頼まれただけです。

そんなのではおもしろくないから、人を呼んでお手伝いします。ワークショップもします。といって、お願いですから手伝わせて下さい。というような話です。

昔は意識して仕掛けたことはありますけど、定常化してしまえばそれは毎年やるものですから、あとはタイミングを一緒に企画する程度で、改めてネゴシェーションやらなければいけないわけではない。今年もやるよね、ということで軽くなった。その分が今のような地元の人達の関心が川祭りであったり、あるいはプロジェクト立ち上げのところとか、その辺に移ってきている。交流はその後ろに隠れていて、そのアドバイスを、必要に応じて様々な人がやっているということです。

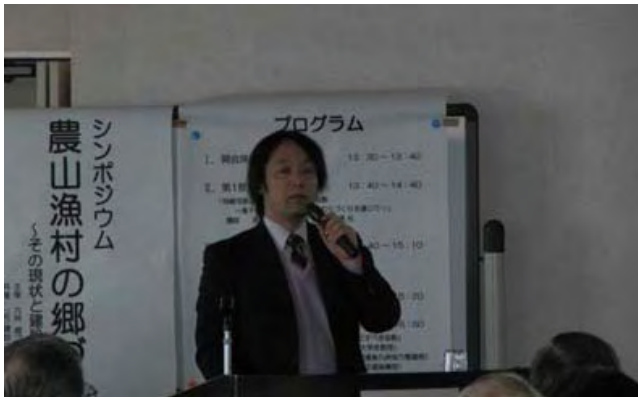
Ⅱ．第２部　共助研活動報告

（１）共助研活動の総括報告　　波木　健一

（２）地域事例研究チームの活動紹介　　森脇　亨

（３）ＧＩＳ分析チームの活動紹介　　平井　一男

（４）地域支援モデル検討チームの活動紹介　　矢ケ部　輝明
前田　武



共助研の活動報告

発表者：波木

共助研は、第４回夢アイディア交流会の中で発表された「人口が減る時代の新しいまちのかたち」の提案をきっかけに平成２０年１１月発足した。

提案は、少子高齢化を新しい地域をつくるチャンスと捉え、自助・公助というこれまでのスタイルに共助という考え方を加え、新しいまちのかたちづくりを図ろうというもの。都市住民が地域にビジターとして入り、ともに考え行動することで新しい地域づくりを目指す。

これに共鳴し、また、建設コンサルタントの業務は色々な地域と関わりを持つが、行政から請けた業務の中だけでの関わりとなっており、もう少し建設コンサルタントが表に出て活動を行おうという発想もあり、平成 19 年８月に準備会が設立された。

準備会では島根県の中山間地域を視察し、安藤さん（わかたの村）、小田さん（NPO ひろしまね）、藤山さん（島根県中山間地域研究センター）より活動について話を伺った。

そこでは「もうひとつの役場」としての活動や、第三者のエキスパートを入れた集落支援センターの仕組みづくり、また、郷モデル構築の戦略的な地域づくりなどすでに色々な活動が行われており、シンクタンクだけではなく「シンク＆Do タンク」という実際に行動することの大切さを教えていただいた。

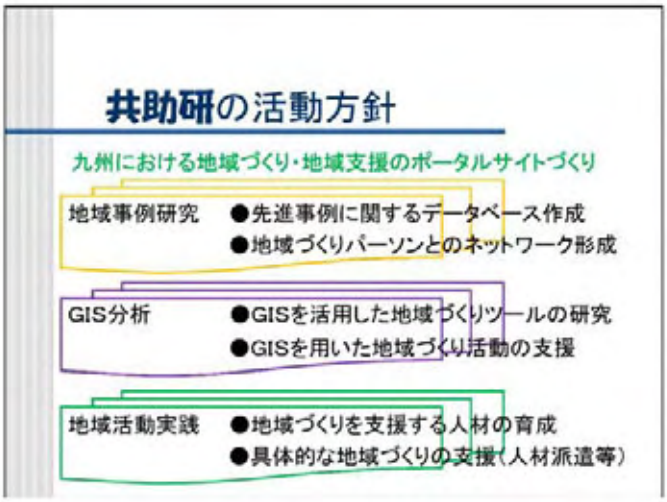
本会は、九州の農産漁村を主体とする地域での「共助ネットワークづくり」に向け、共助の在り方とその実現に向け諸活動を行うことを目的としている。色々な主体がある中で共助研が間をつなぐという考え方。

共助研は建設コンサルタンツ協会のひとつのセクションという形で動いているが、我々の中だけでは活動や発想が狭まるため、賛同会員という形で行政の方や研究者、地域活動をされている方に入っていただき、現在は２０名で進めている。

共助研の活動方針は、地域事例研究、GIS分析、地域活動実践の３本柱である。

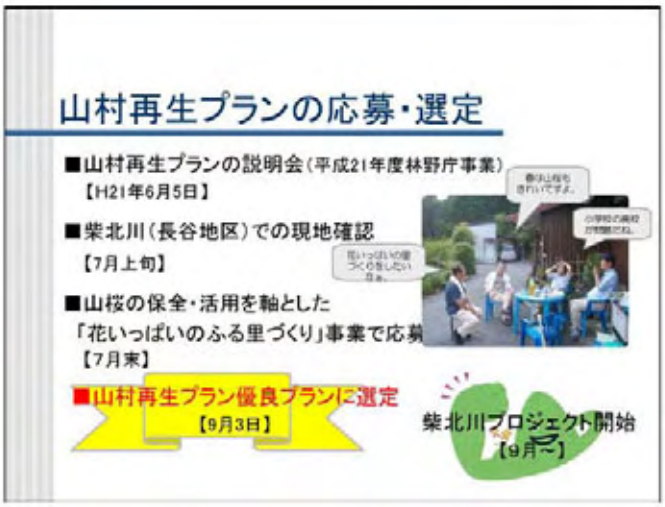
地域事例研究では、先進事例に関するデータベース作成、地域づくりパーソンとのネットワーク形成を行う。

また、島根県の中山間地域研究センターではGIS分析を先駆的に実践されており、地域に入る際はGISを使った地域データが非常に有効であることを教わった。九州でも積み上げて行きたいと考える。

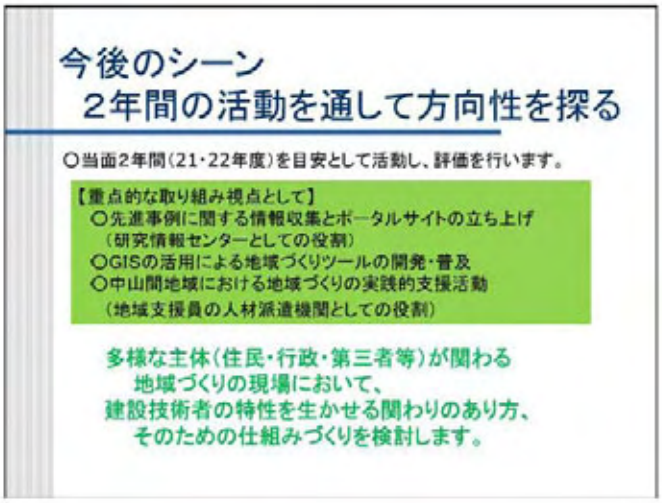


平成21年５月に開催された「大野川流域ネットワーク10周年記念シンポジウム」の中で、大分版夢アイディアコンテストが行われ、最優秀作品賞を受賞した「大分県柴北川を愛する会」との交流がここから始まった。

平成21年６月林野庁募集の山村再生プランに、山桜の保全・活用を軸とした「花いっぱいのふる里づくり」事業で応募したところ優良プランに選定され、９月からは「柴北川プロジェクト」として月に１～２回地域の方と活動を行っている。



共助研は経験のない中で立ち上がっているため、設立当初活動期間を２年間と定め、方向性を探りながら活動を行っている。３本柱の方針に沿い、多様な主体が関わる地域づくりの現場において建設技術者の特性を生かせる関わりのあり方、そのための仕組みづくりを検討し進めて行きたい。

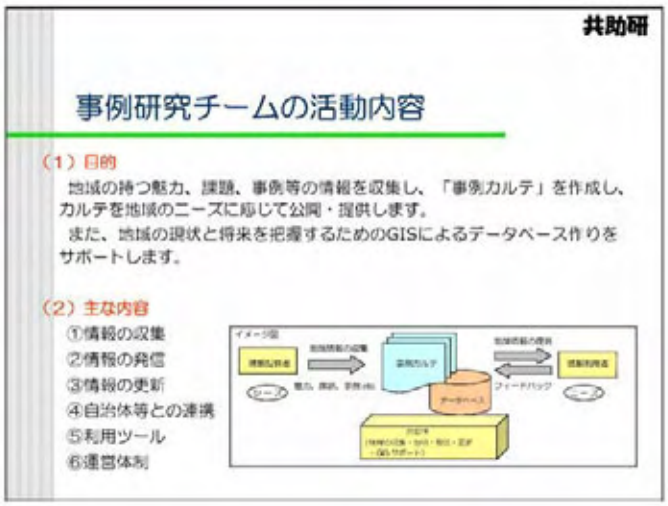


事例研究チームの紹介

発表者：森脇

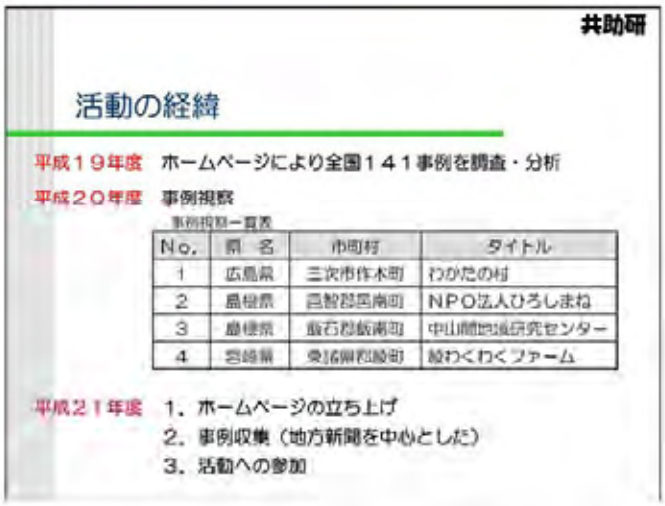
事例研究チームは、地域の持つ魅力、課題、事例等の情報を収集し、「事例カルテ」を作成して地域のニーズに応じてカルテを公開・提供する。

また、地域の現状と将来を把握するためのGIS によるデータベース作りをサポートする。主な内容は、情報の収集・発信・更新、自治体等との連携、利用ツール・運営体制の確立である。



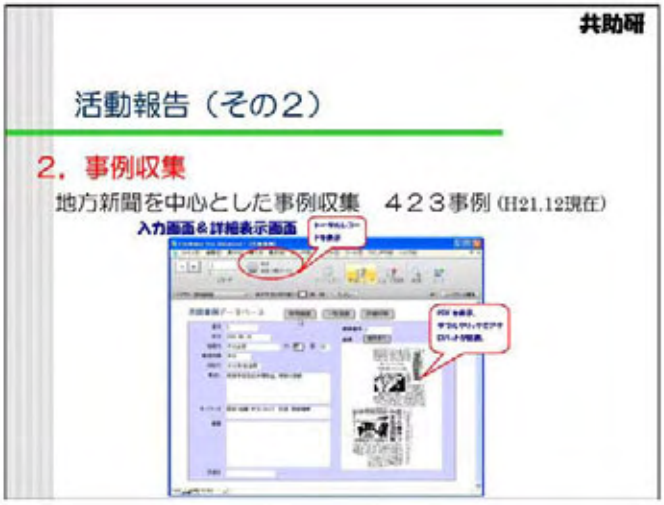
事例は、準備会の頃よりいくつか検討しており、平成 19 年度はホームページにより全国 141 事例の調査・分析を行った。平成 20 年度は、19 年度の結果をもとに 4 つの事例についてヒアリングを行い、カルテ等を作成した。平成 21 年度はホームページを立ち上げ、これらの情報を掲載した。

また、地方新聞を中心とした事例収集や実際の活動の参加を行っている。

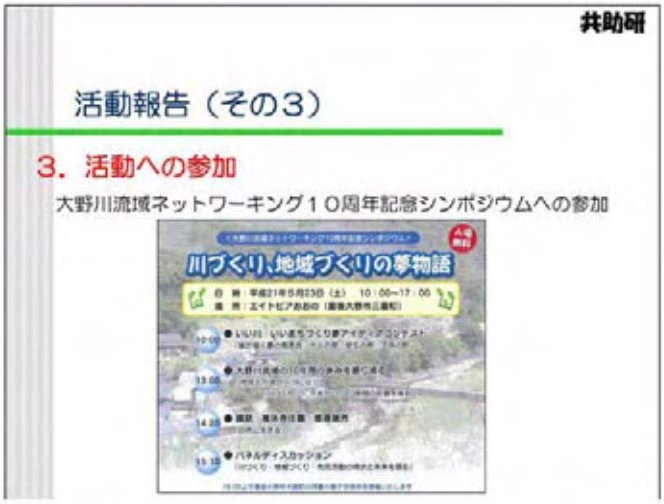


ホームページは、しらべる・組み立てる・参加するの３本柱とその他の活動方針が掲載されており、建コン九州支部に「q-sato」で入っているので是非ご覧いただきたい。

地方新聞を中心とした事例収集を行い、キーワードで検索できるシステムを導入した。ただし、著作権の問題があり会員のみでの閲覧となっている。



事例を調べるだけではなく実際に活動に参加するということで、大野川流域ネットワーキング 10 周年記念シンポジウム等に参加している。

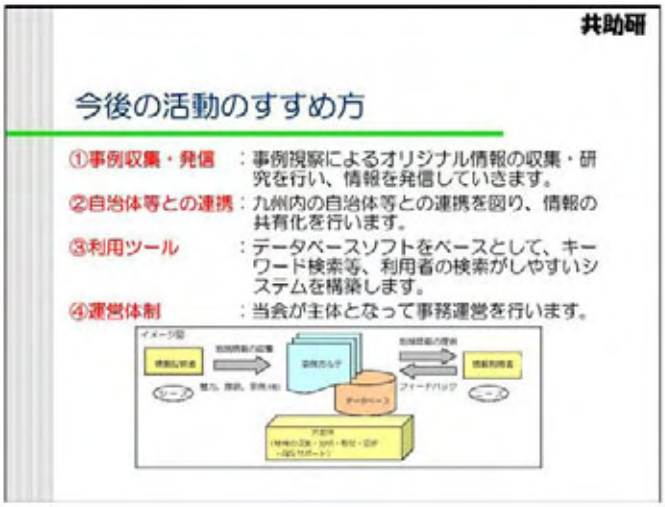


今後の活動については、

①九州内の自治体等との連携を図り、情報の共有化を行う。

②データベースソフトをベースとして、キーワード検索等、利用者の検索がしやすいシステムを構築する。

③当会が主体となって事務運営を行う。



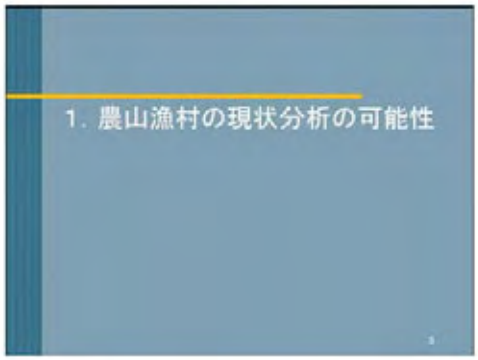
GIS分析グループからの報告

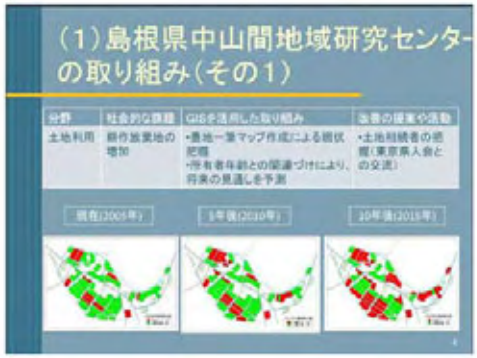
発表者：平山

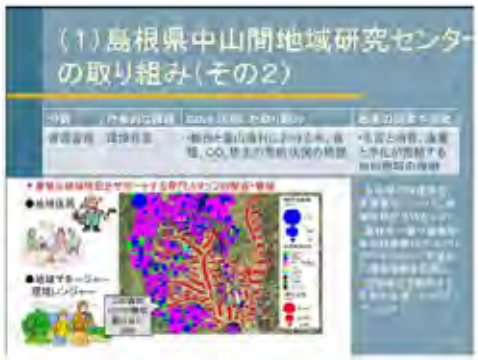
平成21年6月島根県中山間地域研究センターよりGISの構築に関してヒアリングを行った。センターでは、土地利用や資源管理のマップを作成し、色々な情報を付加してシミュレーションを行っている。

耕作放棄地：土地所有者の年齢を関連付け将来の見通しを予測

環境容量　：森林量や CO2 吸収量の管理を行い、環境価値を計る。また、食糧需給の管理を行う。





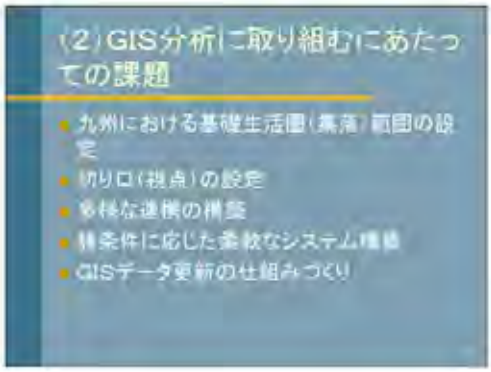


・九州における基礎生活圏（集落）の範囲の設定
地図には集落を線で表現するため、集落の範囲や捉え方等を整理する。

・切り口（視点）の設定
例えば防災のように、人に受け入れてもらい協力が得られる切り口を設定する。

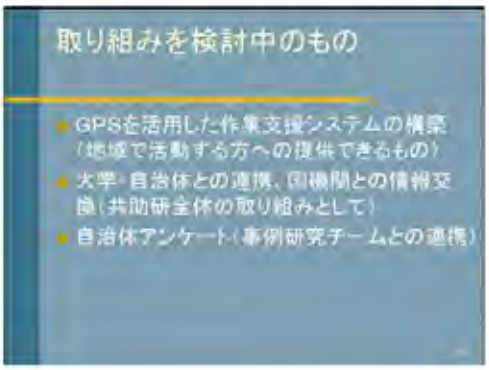
・多様な連携の構築
公共のデータを持っていないため、収集・活用の連携が必要。また、実際に使えるものにするには地域との連携も必要。

・諸条件に応じた柔軟なシステム構築
最初から壮大なシステムをつくるのではなく、市販のソフト等使えるものをうまく組み合わせて行く。



柴北川プロジェクトでは山桜の調査を行っており、GIS チームは GPS を活用し、衛星からの位置情報を図面にする等の作業支援を行った。

今後の取り組み予定について、
・GPS を活用し、使い勝手をよくするようなシステムの構築
・大学・自治体との連携
・アンケートの実施



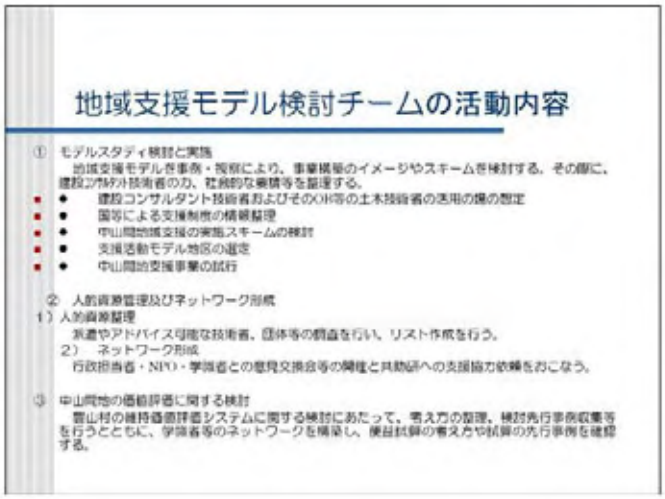
地域支援モデル検討チームの紹介（１）

発表者：矢ヶ部

①モデルスタディ検討と実施
実践として、柴北川についてできることや課題を探す。

②人的資源管理及びネットワーク形成
支援者をひとつのネットワークとして連携をつくるようなものに実践を通して構築する。

③中山間地の価値評価に関する検討
中山間地を守ることの効果や金銭的価値を評価できれば、コンサルタント事業として成り立つことが示せる。

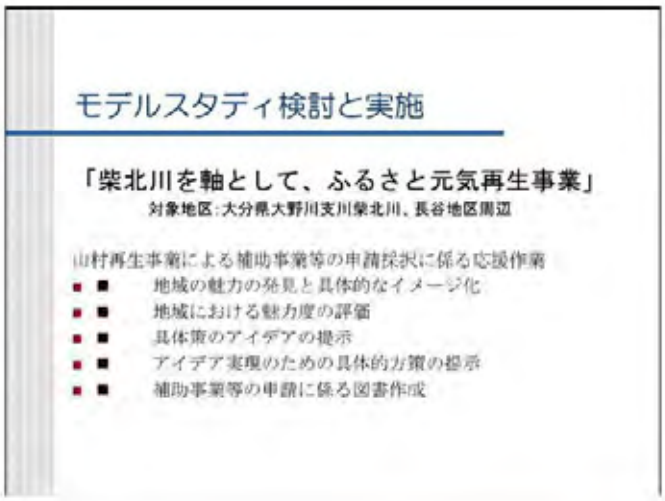


街に住む人が地域にどんな魅力があるのか発見し、それを地域の方々と一緒になって具体的なイメージにする。

また、地域における魅力度を評価する。

そして、これらのアイディアをどう表現して行くか具体的方策を提示する。

その他、申請等の事務的なことについてお手伝いをする。



星印の地域は緑豊かで川の流れも清流である。

今回２つのプロジェクトを立ち上げた。山桜の資源調査と視点場整備は矢ヶ部班長、長谷地区の地域づくりに関するワークショップ開催は前田班長が担当。

山桜調査は、実際の現場に入り Do をしなければならない。

美しい山桜の風景は、地元の方々にとっては当たり前のことで、地域の資源となっている。分布や手入れの必要性等、管理の面ではほとんど手つかずの状態。現状を調査して GIS を活用し、管理ができるようにする。

地元では山桜を中心に「花いっぱい運動」が行われている。山桜を活用した計画書の作成を考えている。

また、視点場の整備を行う。

平成 21 年 10 月、樹医の佐藤先生を招いて地元の方々と勉強会を開いた。

活動は土日に行い、まちづくりの技術士が中心となっているので、やれることとやれないことを判断しながら作業を行っている。調査は、山に慣れたもの、不慣れなもの合わせて十数名で行った。第１回目の調査では２地区28本。急峻なところや竹林のところ、にじりの中に１本ある場合など、こつを掴むのに時間がかかった。だんだん面白みがでてきて、より大きな幹の桜を見つけようと宝探しのようになり、第２回目の調査では70~80本まで行く勢いであったが、夕方になったため60本で切り上げた。

先生の指導で１本１本にナンバリングをし、カルテやGISの作成を行った。

前列は柴北川を愛する会の渡邊会長。
地元の方に指導をいただきながら調査を行った。

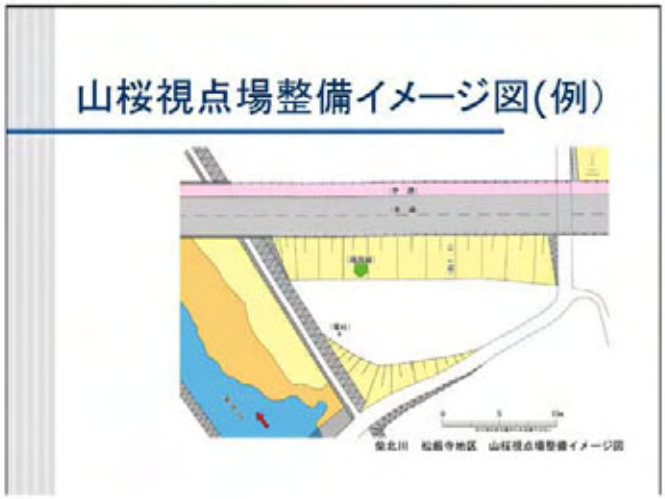
第２回目では針貝会長が参加された。

山桜がどこに分布しているかだいたいの検討をつけるため、地元の方に桜が写っている写真をいただき、それを目標に探した。

山桜がどこから一番見えるか、どこが整備できるか、スタッフと地元の方々と視察を行った。

柴北川の脇に県の用地があり自由に使えるとのことだったので、視点場として一箇所選定した。

現在、会員の中でコンペの形で山桜視点場整備イメージ図を作成中。今年度中に整備も行う予定。桜の季節には是非足を運んで欲しい。

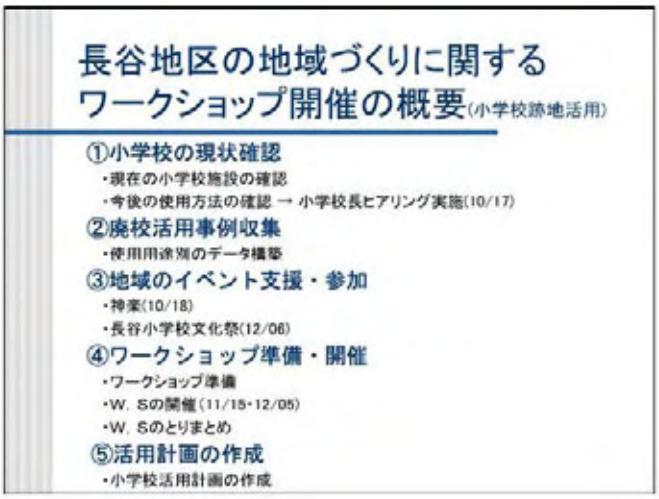


地域支援モデル検討チームの紹介（２）

発表者：前田

長谷地区の地域づくりに関するワークショップ開催支援は、平成 22 年春に廃校が予定されている長谷小学校について、廃校後の小学校を地域の暮らし支援施設としての再利活用方法を、地元住民自らが考える場として開催するワークショップを運営・サポートするものです。

作業内容は、①小学校の現状確認、②廃校活用事例収集、③地域イベント支援・参加、④ワークショップ準備・開催、⑤活用計画の策定の５つを行いました。



小学校の現状確認では、小学校校長のご厚意により、施設内の現地踏査を実施し、今後の利活用の可能性や保存すべき施設内容について資料を取りまとめました。また、この資料は、ワークショップにも活用を図りました。

次に、米光校長先生へのヒアリングを実施し、過去の主だった学校行事や廃校後の学校活用方法についての校長先生の思いなどのヒアリングを行いました。

校長先生は、地域に役立つ施設としての利活用を望まれていました。

次に、現在の廃校利活用状況について、共助研事例研究チームと連携して事例収集を行い、現在の廃校活用の状況把握を行うとともに、ワークショップにおける地域住民の方々への提示資料としてとりまとめを行いました。

なお、当該事例資料は、先ほど事例研究チームの報告にもあったように、今後の共助研の活動に向けたデータベースとして、蓄積されていきます。

また、長谷地区のコミュニティやまちづくり・まちおこしの現状の把握と地区住民の方々との交流を図るために、地区が主催するイベント(お祭り等)に参加を実施しました。

今回は、11 月に黒松地区の獅子舞・黒松神楽見学や犬飼町を舞台とした映画DMCロケ地見学参加、12 月に長谷小学校最後の文化祭の見学行いました。

黒松地区では、青年団による獅子舞や今年から始まった子供神楽が行われ、地区を挙げてのイベントでした。長谷小学校文化祭では、全児童 12 名による研究発表や演奏が行われ、地元住民の６０有余の方々がご覧になられていました。

こうした長谷地区の現状把握を行った上で、共助研では、長谷小学校跡地利用を地区住民で一緒に考えるためのワークショップ準備・支援を進めました。

準備・支援としては

・参加者募集用チラシ作成
・開催内容を記載した回覧板作成
・進行役、ファシリテーター、書記
・討議内容の検討
・とりまとめ

また、ワークショップという言葉が地区の人々に判りづらいとの指摘があり、「話し合う会」と表しました。

なお、ワークショップは全２回開催－第１回は小学校・長谷地区への思い、第２回は、小学校利活用を想定。ワークショップは３班構成で、参加者が討議を行いやすいブレーンストーミング→ＫＪ法を活用。

討議内容は学校活用に限定せず、長谷地区のまちづくりのあり方について話し合い、その中で学校活用の方向性をピックアップする方向で検討することとしました。

第１回は、11/15 に参加者１９名で、会場は長谷小学校体育館にて開催。

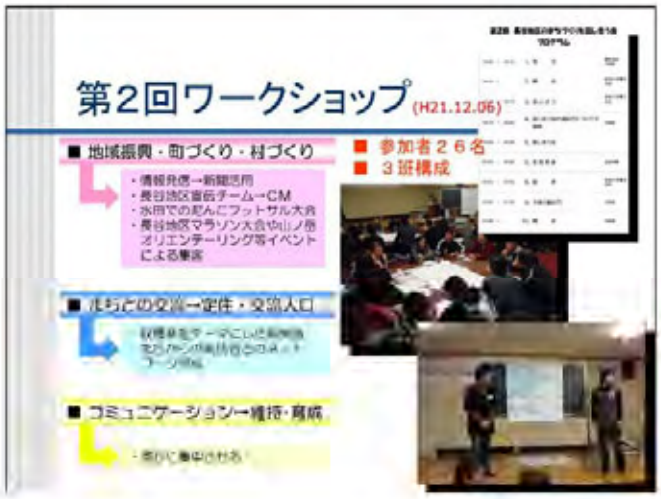
ワークショップは、長谷地区の良い、悪いところと 10 年後よくなるところ、悪くなるところといったことをテーマに討議を行い取りまとめ、各班ごとに発表しました。

その結果のとりまとめは、スウォット分析を用い、「良好な自然」・「地域資源」・「良い人柄」と「ファンクラブ」・「大野川流域ネットワーキング等の支援団体の存在」から「地域を活かしたまちづくりの推進」、「希薄なコミュニケーション」・「高齢化」・「人口流出」と「学校区再編」などによる「地域活動再生」・「定住・交流人口増加」などへ対応の課題を抽出しました。

第２回は、12/6 に参加者 26 名で、黒松生活改善センターにて開催。今回は、柴北川を愛する会のご努力により、中学生の参加があり、若者の考えを聞けました。

ワークショップは、第１回で抽出した「地域活動再生」・「定住・交流人口増加」といった課題への対応として、①「まちとの交流(定住人口・交流人口)」、②「コミュニケーション(維持・育成)」、③「地域振興(まちづくり・むらづくり)」の３つのテーマを設定し、討議を行いました。

その結果、●来訪者とのネットワーク構築→そのための祭り・イベントの実施、●新聞・メディア活用や宣伝隊による情報発信などの対応策が抽出されました。

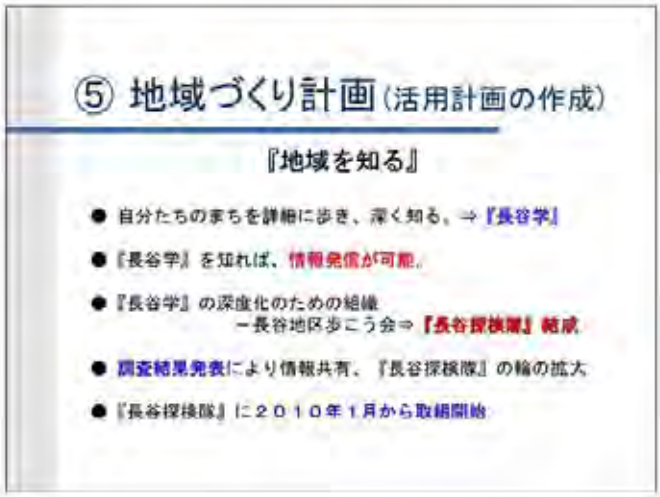


ワークショップの討議を基に、長谷地区の地域づくりの方向性としては、【地域を知る】ことが第一であるとの結論に達し、

- ●長谷地区に住んでいる人が、地区を歩いて周り、自分たち地区をもっと深く知る。
  ⇒「長谷学」の形成
- ●長谷学について知れば、情報発信が可能
- ●長谷地区の人を誘って細かく歩くことが第一歩
- ●長谷地区を歩こう会を作り、地区を調べる。参加自由

『長谷学』を深めるための歩こう会
→名称『長谷探検隊』

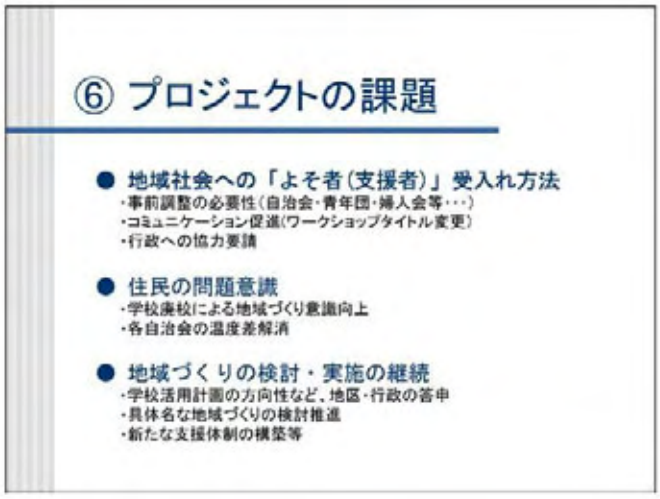
- ●歩いて判ったこと→発表会実施、地区全体の人と情報共有しながら『長谷探検隊』の輪拡大
- ●『長谷探検隊』2010 年１月から取組みたい。



本ワークショップ本来の目的は、小学校跡地活用を討議することでしたが、柴北川を愛する会のご努力にもかかわらず、地区自治会や他の団体から「よそ者」が勝手に何をやっているかとの指摘を受け、●参加者募集チラシの配布中止、●「柴北川を愛する会」会員参加によるワークショップの実施、●話し合う会のテーマを「学校跡地活用」から「地区のまちづくり」へと変更など、当初のワークショップの意図とは異なるものとなりました。結果として、事前調整やコミュニケーション促進および行政の支援など地域社会への支援者受け入れ方法の検討が必要であったと思われます。

また、地域住民の方々で、小学校の廃校について地域間で意識に差異が見受けられたことから、各自治会の温度差解消や廃校に伴う地域づくりの意識向上など、住民の問題意識の醸成方法を考える必要があると思われます。

もうひとつ、今回のワークショップ支援では、具体的な学校活用計画の策定までたどり着けませんでした。地域や行政に答申できる活用計画や支援体制の確立など、地域づくりの検討・実施の継続が必要であると思われます。



当該プロジェクトの今後の展開として、

・長谷地区のまちづくり・活性化に向け地区の良さの再発見→中学生を主体とした「長谷探検隊」の結成(平成22年1月予定)・「長谷探検隊」の活動において、発見された地域資源や新たな産業のヒントを具体化

↓

・活動の拠点の必要性

・来訪者への情報発信基地・サロン→場所が必要

↓

長谷小学校跡地